

完了報告書

記入年月日 2026年2月16日

採択団体名 学校法人みゆき学園幼保連携型認定こども園恵水幼稚園

■事業概要

基本情報	
事業名	未就学児への防災教育 楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災～持続的な取組みによる地域共創社会構築を目指して～
事業内容	事業内容①:防災教育ワークショップ 事業内容②:保育教材(幼児に対する災害時クイズ等の制作) 事業内容③:国内の幼児に対する防災教育・地域づくりの情報収集
事業背景	近年、日本各地で地震・豪雨・台風などの自然災害が頻発しており、防災教育の重要性はますます高まっている。特に未就学児期は、日常生活を通して基礎的な態度や習慣が形成される重要な時期であり、防災に関する初期的な気付きや態度を育むことが、将来的な防災リテラシーの基盤となる。しかし、現状の防災教育は小中学校以降を対象とするものが多く、未就学児に焦点を当てた体系的な実践や教材は十分に整備されていない。また、幼児の発達段階に応じた学習方法や教材の開発、家庭・地域を巻き込む形での実践は限定的である。よって、当団体はワークショップや教材・カリキュラム開発を本事業で行い、幼児教育・保育における防災教育の手法を提案したい。
コミュニティ 設立の経緯	本事業においては、保育者が子どもに対して防災について教えるという一方的な教育の形ではなく、子どもが地域住民とつながり、共に防災について学び合うという手法を取る。それは災害時に備え、地域住民と顔の見える関係性の構築を重要視しているためである。そのためコミュニティ設立においては、様々な分野のメンバー(行政、民間企業、大学)と連携している。なお連携関係者とは、今回の事業のためだけに連携を開始したのではなく、恵水幼稚園の「未来の幼稚園をつくる」というビジョンに共感し協働してきた関係性で成り立っている。過去にはこれらの連携を用いて、新たな教育手法の研究や、園での取り組みを番組化しテレビ放送などを行っている。
本事業に関する過去の 取り組み内容	①おさんぽプロジェクト 外出に困難を抱える地域の高齢者を誘って一緒におさんぽに出かけるプロジェクトで、顔の見える関係性構築と合わせて、散歩コースにおける安全性の確認などを行い、現在も形を変えながら継続した教育活動となっている。 https://researchmap.jp/masako10/misc/40735020/attachment_file.pdf ②バイオディーゼル保育 家庭廃油を集めてバイオディーゼルに精製し、園バスへの給油を行うとともに、その一連の内容を保育教材化して環境教育を行っている。この活動結果の一つが、能登半島地震における被災地支援事業である。子どもや保護者、地域住民の集めた家庭廃油450ℓがバイオディーゼルとなり、電気自動車(被災地自治体)のための発電機稼働燃料となった。これらは教育活動が被災地支援活動につながった例として、海外で高く評価された(OMEP, 2024)。 https://researchmap.jp/masako10/presentations/46702334/attachment_file.pdf
事業体制	・株式会社アクションラボ(民間):キッズ防災士認定講座企画 ・コンセプトラボ株式会社(民間):ワークショップ報告書作成支援 ・崇城大学 SCB 放送局(大学):防災音当てクイズアプリ開発 ・幸田まちづくりセンター(行政):子どもたちへの地域の防災設備の紹介 ・御幸校区自治会(地域):子どもたちや幼稚園等とのコミュニティ構築 ・恵水幼稚園(教育・保育):事業統括、保育・教育カリキュラム作成と実践

<p>全体スケジュール</p>	<p><10月> ・園でのワークショップ実施(炊き出し体験、避難所へお散歩、防災食おにぎり作り、暗闇体験) <11月> ・防災音当てクイズアプリ制作に向けた検討会議 <12月> ・防災音当てクイズアプリ制作(園児との対話による事前調査～プロトタイプ制作) ・日本世代間交流学会での成果発表 ・北海道視察(はやきたこども園、函館西高等学校) <1月> ・防災音当てクイズアプリ制作(最終調整～完成～現場で実際に使用) ・園でのワークショップ実施(光の講座、キッズ防災士認定式) ・京都/奈良視察(京都女子大学、奈良おもちゃ美術館)</p>
<p>事業目標・事業成果</p>	
<p>事業目標全般 (教育提供者側)</p>	<p>■防災教育の提供者 ①本事業で、「楽しみながら学ぶ」ことを重視した防災教育を未就学児に導入し、教材開発とワークショップを通じて実践的に検証する。 ②国内における幼児防災教育の事例を収集するとともに、地域づくりの先進事例の視察を行う。また、山の保全と防災の視点から国内産木育教材開発を進めている先進事例の視察も行う。これらの先進事例をもとに今後の保育教材開発の参考としたい。</p>
<p>事業成果全般 (教育提供者)</p>	<p>①炊き出し体験における実施結果の内容は日本世代間交流学会において発表済である(以下、参照)。 https://researchmap.jp/masako10/presentations/51724390/attachment_file.pdf また、他の地域等におけるコミュニティ防災教育の参考となるように、今回のワークショップの内容をまとめた冊子を発行し、コミュニティセンターや自治体等に配布した(成果物1参照) 防災音当てクイズアプリは開発まで完了し、実際に園児に使用してもらった(成果物2参照) ②はやきたこども園(北海道)においては、北海道胆振東部地震の際の状況(お泊まり保育中の被災)についてヒアリングを行うとともに、地域の高齢者を入園させるという最近の取り組み(地域づくり)についても情報を得た。また、函館西高等学校におけるヒアリングでは、高校生から一日防災学校(近隣園児との避難訓練)の情報を得た。 ③その他の成果として、本事業の取り組み内容をまとめ、J:COM 熊本で放送した(以下、参照)。 (番組サイト)https://c.myjcom.jp/jch/kyushu_shimonoseki/regular/chikichiki.html (YouTube)https://youtu.be/sInE1bXEfts?si=sMBLZukHQYNLd7nT</p>
<p>事業目標全般 (参加者側)</p>	<p>■防災教育の参加者 ①子ども:「楽しみながら学ぶ」ことを重視した防災教育を通し、日常的な保育・教育カリキュラムとの連関の中で生きる力が育まれる。 ②地域住民:子どもとの活動を通し、顔の見える関係を構築するとともに、子どもと園に対する理解を深める。 ③地域社会:園と地域との連携強化。</p>
<p>事業成果全般 (参加者側)</p>	<p>①防災教育カリキュラム対象園児(年長:64名、年中:54名、年少:63名)において、年長クラスでは「避難場所・避難所についての調べ学習(地域交流含む)」、年中クラスでは「炊き出し体験(地域交流含む)」、年少クラスでは防災食としての「おにぎり作り」を実施。特に「炊き出し体験」については、アンケート代りのお絵描き活動を実施し、地域住民との関わりが子どもの中に印象付けられた可能性について分析し、33%の子どもにその傾向が確認できた。 ②炊き出し体験において地域住民8名が参加した。子どもと一緒に調理・共食を行い、子どもとの交流機会を経験し、園の教育・保育に対する理解の深化が見られた。 ③保護者に対して炊き出し保育のアンケートを行った。その結果、19名(母親18名、父親1名)からの回答が得られた。自由記述では、選択式回答では見えなかった「家庭での防災の語り」が複数確認された。過去の保護者の災害経験を子どもと共有し、学んだ内容を話した子どももあり、家庭で防災を語る契機を生み出していたことが分かった。 ④炊き出し体験では地域の方々、防災音当てクイズ大学生と一緒に活動に取り組むことができ、園外の方々となつながら、普段接することがない方々と一緒に防災について学ぶことができた。</p>

<p>展開できる 知見やノウハウ</p>	<p>当団体の強みは、多様性のあるコミュニティである。恵水幼稚園では、「未来の幼稚園をつくる」ということをビジョンとして掲げており、そのビジョンに共感する異分野の企業や団体と常日頃から連携している。過去には、この多様なつながりを活用し、SDGsの学びやお仕事体験などを行った。本事業でも、自治体や行政、防災に関する事業を行う企業、教育学を専門としている大学、情報学を専門としている大学など、多様なつながりを活用して行っている。多様なつながりは、お互いが新たな知見を得ることができるため、新たな価値観が生まれやすい。よって、本事業の手法で構築するコミュニティも防災教育だけではなく、地域課題の解決、地域活性化やイノベーション創発にも寄与できることが期待できる。</p> <p>また、本事業において予定されている成果物には、未就学時期における防災教育の指導案を含むカリキュラムの提案が挙げられる。先行研究や先行実践に見られる幼児期の防災カリキュラム・活動は、園内の保育・教育において展開される「保育者→子ども」という関係性の中で実施されるものが多い。本事業では「子ども」を中心において、保育者以外の多様な大人が保育・教育に参画するという実施形態に特色を持っており、そこから得られる知見は、今後の未就学期の子どもに対する防災教育に資するものであると考える。</p>
<p>コミュニティ防災教育の重要な観点</p>	<p>コミュニティ防災教育を行うにあたり留意したことは、役割を決めず、誰もが提供者にも利用者にもなりうる仕組みを構築することである。一般的な保育・教育は、保育者が提供者として、利用者である園児に教えるというように、大人が教える側で、子どもが教わる側と役割が定まりやすい。しかし、コミュニティを構築する上では、例えば、連携している大学生が園児に防災について教えたり、園児が学んだことを地域住民に教えたりというように、状況に応じて提供者と利用者の役割が変わり、お互いが持つノウハウを共有できるようにすることが重要である。特に災害時には、保育者が園児を助ける立場になる可能性もあれば、園児が地域住民を助ける立場になる可能性もある。そのためにも、提供者/利用者の役割を明確に決めず、状況に応じて誰もが提供者にも利用者にもなりうるコミュニティを構築する必要がある。</p>
<p>残課題等</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域参加に不安を示す子どもへの個別支援 人的環境の変化による混乱が一部に見られ、事前の関係づくりや選択的参加などの環境調整が求められる。 2. 家庭における防災対話の継続支援 保護者の災害経験の差異を踏まえ、語りを補助する資料やワークの整備が必要である。 3. 防災音当てクイズアプリの改善 年齢に関わらず、さまざまな子どもたちが使用できるように、アプリの機能改善や追加が必要である。 4. 視察結果を踏まえたコミュニティ防災教育カリキュラムのアップデート 視察を行うことで得た新たな知見を従来の防災教育カリキュラムと組み合わせて、新たなカリキュラムへアップデートを行う。

■事業内容

事業内容① 防災教育ワークショップ	
<p>事業内容①目標 (提供者側)</p>	<p>・「楽しみながら学ぶ」ことをテーマに、実際に複数のワークショップを企画/実施し、園児の気付きやカリキュラムについて検証を行う。 ・検証結果をもとに、幼児教育における防災教育に寄与する教材の開発やカリキュラム構築を行う。</p>
<p>事業内容①目標 (参加者側)</p>	<p>・ワークショップに参加することで防災について楽しみながら学び、実際に災害が起きた場合に、自分や身の回りの人を助けるための行動を取れるようにする。 ・ワークショップを通して地域住民や大学生等、園外の人々と園児が顔の見える関係を構築することで、災害時の共助や、その他の活動での協力など、地域共生社会のためのコミュニティを形成する。</p>
<p>事業内容① 炊き出しワークショ ップ (実施日:10/28)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 地域の人と一緒にだご汁づくりを行った。炊き出し体験を通して、園児が実際に体を動かし、見て・聞いて・感じることを重視した。 ■成果(提供者 or 参加者) 参加者:園児が「もしも」の状況を想像し、自分なりの言葉で防災について話す姿が見られた。</p> 
<p>事業内容① その他ワークショッ プ (実施日:10/14- 10/23)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 日常の主活動の一環として、以下のワークショップを行った。 ・10/14、10/20、10/23:避難所へお散歩体験 事前にマップを見て、近隣にある避難所/避難場所を確認したうえで、実際に歩いて行ってみた。 また、幸田まちづくりセンターを見学し、備蓄倉庫を見せもらった。 ・10/17、10/21:防災食おにぎり作り 防災食とはどのようなものか、どのような時に必要かを考え、実際におにぎりを作った。 ・10/17:暗闇体験 災害時には、停電等により光源のない中で生活する可能性があることを知ったうえで、光のない世界を体験した。 ■成果(提供者 or 参加者) 提供者:それぞれの活動で、一方的なレクチャーだけではなく、園児の考えを引き出す時間を設けたことにより、気付きが深まりやすい構成となった。 参加者:ワークショップに参加することで、疑似的に災害時の状況を体験し、その上でどのようにすれば生活ができるか考えることができた。</p>   
<p>事業内容① 日本世代間交流学会 発表 (実施日:12/20) ※事業内容③とも重 複</p>	<p>■具体的な取り組み内容 炊き出しワークショップの実施結果をまとめて、ポスター発表を行った。 また、学会の他の参加者(保育・教育関係の研究者)との意見交換を行い、新たな知見や情報を得た。 ■成果(提供者 or 参加者) 提供者:ワークショップの成果を伝えるとともに、多くの方と情報共有ができた。特に、東日本大震災の際に支援を行った教授と、保育園と幼稚園で避難訓練の実施方法や頻度が異なる点についてお互いに話し、当園での今後の避難訓練についても考えることができた。</p> 

<p>事業内容① 光の講座/キッズ防災士認定式 (実施日:1/19)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 10/17に行った暗闇体験の際に、子どもたちが災害時の光の重要性について気づきを得た。そのことを踏まえて、講師から災害時の光について教えてもらい、ペットボトルを使った体験を通して、改めて災害時の光の活用について学んだ。 また、4ヶ月間のワークショップを通して災害や防災について学んだ年長児へ、「キッズ防災士」という独自の認定証を授与した。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) 参加者:実際の体験を通して、光の扱い方を知り、「光があると安心する」という気づきを子どもが自ら得ることができた。</p>	
<p>事業内容①を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点 ワークショップを行うにあたり、災害についての説明を園児に行ったが、年齢差による気づきの違いが大きかった。</p> <p>■乗り越えた方法 災害について自ら気づきを得るために、年齢別に問いかけ方を工夫したり、体験内容の調整をしたりして、園児に対して無理のない気づきを促した。</p>	
<p>事業内容①を実施する上で工夫した点</p>	<p>ワークショップでは基本的に、体験を中心に据えた構成とした。これにより、保育者が園児に「正解を教える」ことをせず、園児自身が気づくことで学びを得るという様子が見られた。炊き出しワークショップでは、最初にプレゼンを使い災害や防災の話をも園児に行った。その際、写真を見せながら災害とはどういうものかを説明し、その後「防災とは何か」という問いを投げかけ、園児が自ら考えるように工夫した。</p> <p>また、ワークショップには地域住民にも参加してもらい、積極的な交流・対話を促した。これにより、保育者からではなく、地域住民から園児が教えてもらうという構図が生まれた。</p>	
<p>事業内容① 残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップへの地域参加に不安を示し、混乱をする園児が一部見られた。そのため、平日頃から地域住民と顔を合わせることや、選択的参加などの環境調整を行う必要がある。 ・今回の活動が単発の活動に留まっているので、今回の実践をもとに体系的なカリキュラムを設計し、継続的に防災教育が行えるように整備する必要がある。 	
<p>事業内容② 保育教材(幼児に対する災害時クイズ等の制作)</p>		
<p>事業内容②目標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が簡単に操作可能なサイレン音当てクイズアプリを構築し、幼児向けの防災教育に活用できるようにする。 ・保育者が、クイズアプリを使った効果的な防災教育を行えるよう指導方法を検討する。 	
<p>事業内容②目標 (参加者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園児が、サイレン音当てクイズアプリを使用することで、普段の生活であまり聞くことのないサイレン音に触れ、サイレン音がどのような意味を持つのかを知り、有事の際に冷静な行動ができるようになる。 ・園児がクイズに挑戦するだけでなく、クイズアプリを家族や地域住民に持っていき、クイズアプリを通して地域コミュニティを構築できるようにする。 	

<p>事業内容② 防災音当てクイズアプリ制作事前調査 (実施日:12/18)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 アプリを構築する大学生が紙ベースの資料を持参し、園児へ見せ、どの程度気付くことができるかを調査した。資料には、イラストと災害の名前(地震、津波、洪水など)がひらがなで書かれており、それを見せたうえで、どういふ災害か口頭で紹介した。 また、それぞれの災害に対応したサイレン音を聞かせ、園児にどのような色をイメージしたか、カラー見本に指をさしてもらった形式で調査した。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) 提供者:年中、年長はある程度災害やサイレンの違いについて気付くことができるとわかった。一方で、年少はイラストや音で災害を伝えることは難しかった。</p>	
<p>事業内容② 防災音当てクイズアプリ事前テスト (実施日:12/22)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 事前調査を踏まえ、実際にプロトタイプを構築し、園児にテストした。 今回の事前テストでは、音声を流した上で、どの災害のサイレン音が聞こえたか、スマホの画面をタップして回答する形式のアプリを試した。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) 提供者:今回のテストでは、年中・年長児はある程度スマホの操作ができるが、年少は補助があることで操作できるとわかった。その他、テスト結果を踏まえて、1/16の本番は年少と年中・年長で活動方法を変えて行うことにした。</p>	
<p>事業内容② 防災音当てクイズ (実施日:1/16)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 事前調査を踏まえ、大学生が開発した防災音当てクイズアプリを実際に園児に使ってもらった。クイズは、スマホからさまざまなサイレン音が鳴り、それぞれどの災害の際のサイレンか、災害をイメージしたイラストの選択肢から選択するというものである。メンターは学生に行ってもらい、園児がクイズをスマホで解く間、学生がサポートを行った。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) 提供者:今回のメンターを先生ではなく、大学生とすることで、外部との新たなつながりが生まれた。 参加者:地震や大雨など、普段から聞き馴染みのあるサイレンから、津波やJアラートなど普段聞いたことのないサイレンまでを聞き、サイレンの違いについて気付くことができた。また、普段接することのない大学生とアプリを通して関わりを持つことができた。</p>	
<p>事業内容②を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点 幼児とあまり触れあつたことのない大学生が災害について園児に伝える中で、言い回しや表現の方法に困ることがあった。</p> <p>■乗り越えた方法 学生が苦戦する中で、園の保育者がお手本として、一度例を見せた。ミサイルのイラストを見せながら、「お空に飛行機が飛んでいるのを見たことがある人いるかな?」「ロケットは見たことあるかな?」「ロケットがみんなのお家に飛んで来たらどうなるかな?」と質問形式で園児に連想させる手法を見せた。その光景を見た上で、学生も真似をして園児へわかりやすく伝えることができた。</p>	
<p>事業内容②を実施する上で工夫した点</p>	<p>今回の事業で構築するアプリはあくまでツールであり、このツールを通して、園児と地域住民などがつながり、コミュニティを構築することを期待している。そのため、必ずしも「保育者が提供者」「園児が参加者」と役割が依存することのないようにアプリも設計している。つまり、大学生が園児に教えることも、園児が地域住民に教えることもできるようにする必要がある。そのため、誰しもが扱いやすいよう、災害について色やイラスト、アニメーションや音声を使って伝えるなどインターフェース設計により一層力を入れている。</p>	

<p>事業内容② 残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢別に正答率が異なり、特に年少には使用することが難しかった。今後、わかりやすい UI への改善や機能の追加、指導方法の検討が必要である。 ・今回は園で学生と子どもたちがアプリを使用した。今後、子どもたちがこのアプリを家庭や地域の方々と一緒にできるよう、各所との連携や環境整備が必要である。
<p>事業内容③ 国内の幼児に対する防災教育・地域づくりの情報収集</p>	
<p>事業内容③目標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国内における幼児防災教育の事例を収集するとともに、地域づくりの先進事例の視察を行う。 ・山の保全と防災の視点から国内産木育教材開発を進めている先進事例の視察を行う。 ・収集した先進事例をもとに、今後の保育教材開発を行う。
<p>事業内容③目標 (参加者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・先進事例を参考に開発した保育教材に触れることで、防災について学びが深まるようにする。 ・視察の際に新たに連携した団体と、園児や地域住民等がつながり、それぞれが新たな知見を得られるようにする。
<p>事業内容③ 北海道視察 (実施日:12/21-24)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 幼児防災教育の事例を収集するためにはやきたこども園を視察し、北海道胆振東部地震での経験等をもとに話を聞いた。 また、生徒主体の防災教育を行っている函館西高校を視察し、高校での防災教育のカリキュラムについて聞き、防災教育の必要性や重要性について、それぞれの立場から意見交換を行った。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) 提供者:はやきたこども園では、地震発生は夜中であったがお泊まり保育中であり、実際に子どもを守るためにどのような行動を取ったか事例を聞くことができた。 また、函館西高校にて生徒主体で行っている防災教育カリキュラム「1日防災学校」についての話を聞いたことで、園での防災教育カリキュラム構築の参考になった。</p> 
<p>事業内容③ 奈良・京都視察 (実施日:1/16)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 幼児教育における木育と防災教育の関連性を探ることを目的に奈良おもちゃ美術館を視察した。 また、山の保全および防災の視点から国内産木材を活用した木育教材開発を進めている先進事例を学ぶため、京都女子大学の矢野教授と(有)岩井木材の岩井代表の話を聞いた。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) 提供者:視察の中で、実際に木に触りながら体験することで、木育おもちゃが防災教育の導入として有効であることを確認した。子どもたちにとって木育おもちゃで遊ぶことは、五感を使い、自然環境や防災への興味につながるということがわかった。また、山の保全と防災が密接につながっていることもわかった。</p>  
<p>事業内容③を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点 視察を行った結果、新たな知見を多く得ることができたが、これらを体系的に位置づけるための指導計画やカリキュラム整理を行う必要がある。また、新たな教材導入にあたり、コストや継続的な活用、安全管理なども検討が必要である。</p> <p>■乗り越えた方法 指導計画やカリキュラム整理については、園内でも検討を行う他、外部の専門家や今回視察させていただいた方々とも協力して行っていく。</p>

<p>事業内容③を実施する上で工夫した点</p>	<p>北海道視察では、防災教育の先進事例や関連して地域づくりの先進事例を収集することを目的に行った。また、奈良・京都視察では、山の保全と防災の視点で国内産木育教材開発を進めている先進事例を収集することを目的に行った。これらは、身の回りでは事例収集をすることが難しく、実際に先進的な取り組みを行う県外の現地を視察することで、新たな知見を得ることができた。また、今回視察を行ったことで新たなつながりも生まれ、協力関係を結ぶことができた。</p>
<p>事業内容③ 残課題等</p>	<p>・視察で収集した情報をもとに、当団体が行ってきた活動をブラッシュアップし、より効果的なコミュニティ防災カリキュラムを構築し、実践していく。</p>

内閣府 令和7年度 地域防災力の向上に資する「コミュニティ防災教育推進事業」

未就学児への防災教育
楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災
～持続的な取り組みによる地域共創社会構築をめざして～



2026年1月31日

学校法人みゆき学園 幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園

目次

1. はじめに.....	1
2. 取り組みに至る経緯.....	3
2-1. 未来の幼稚園づくりを見据えた園内体制の確立	3
2-2. ESD・防災教育の研究的蓄積と大学との協働	4
2-3. 地域の多様な人・組織とのつながりの醸成	4
2-4. 積み重ねた経験を“防災教育”として統合する段階へ	4
3. ゆるやかなつながりの仕組みづくり	6
3-1. つながりの種類	6
3-2. つながる手法	7
4. 全体構造の整理と展開	8
5. 具体的な活動内容.....	10
5-1. 多世代による炊き出し体験	10
5-2. 避難場所と防災施設の体験学習	13
5-3. 防災マップづくりと安全ウォーク	14
5-4. 暗闇体験とエネルギー探究.....	15
5-5. 備蓄倉庫から学ぶ	17
5-6. 非常食と食文化	18
5-7. 幼児向け防災教育アプリ体験	19
5-8. キッズ防災士認定	20
6. 取り組みを通して見られた変化.....	22
7. これからの展望	23
参考文献.....	23
巻末資料.....	24



1. はじめに

一般に、日本は災害が多い国だといわれています。近年も、令和 6 年能登半島地震をはじめ、さまざまな災害が各地で発生しています。こうした状況を受けて、内閣府（2026）では、災害から人命を最優先で守る「防災立国」を早急に実現するため、能登半島地震などの教訓を踏まえた災害対応の強化や、令和 8 年度からの防災庁設置を見据えた取り組みを進めています。

この防災への取り組みは、地域においても早急に進める必要があります。しかし一方で、人口減少や人口流出による人手不足、地域経済の低下による資源不足などの影響で、十分な防災対策を行うことが難しい地域もあります。こうした状況について、内閣府（2025）は『令和 7 年版防災白書』の中で、「地域によって防災力に差が見られる」と指摘しています。さらに、防災力を全国に広げていくためには、防災意識の高い「地域コミュニティ」の取り組みを各地に展開し、災害が起きたときに効果的な対応ができる社会をつくっていくことが重要であると提言しています。

防災意識の高い地域コミュニティを、資源が十分ではない地域において築いていくためには、地域住民をはじめ、住民による地域団体、自治体、企業、教育機関など、さまざまな**地域の組織が、日ごろから互いに連携し、つながりを持つことが大切です。**

本冊子では、私たち学校法人みゆき学園 幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園が、内閣府による「令和 7 年度 地域防災力の向上に資するコミュニティ防災教育推進事業」において実施した取り組みを紹介しています。本事業では、幼少期のこどもから大人までを対象に、防災の力を高めるとともに、地域を担っていくという意識を育むことを目的として、地域住民や地域団体、教育機関（大学などの学校、保育所や認定こども園、コミュニティセンターなど）、さらには地元企業が連携し、地域全体のつながりを用いて防災教育活動に取り組みました。

この取り組みにおいて、私たちは、幼少期のこどものための教育機関として「こどもの視点を大切にすること」を意識し、「こどもの経験を起点とした防災教育」の実現を目指しました。さらには恵水幼稚園の「未来の幼稚園づくり」というビジョンと融合させて、「**楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災**」という活動コンセプトを掲げました。このコンセプトのもと、こどもたちが、さまざまな防災体験を通して学び、その学びを地域の人々に発表したり、ときには教えたりすることで、こども自身の気づきを深めるとともに、地域全体の防災意識を高めていくことを目指しました。

この冊子を手にとってくださった、こどもや防災と関わりを持つみなさまに、こどもと地域が互いに教え合い、学び合うことで、防災の大切さが地域に広がっていくことの意義を感じていただけましたら幸いです。

<コラム> ～地域には防災情報共有の壁がたくさん～

・ひとり世帯と日ごろからつながることの難しさ

総務省(2021)によると、核家族化や未婚率の上昇により、日本で最も多い家族形態は「単独世帯」(世帯人員がひとりの世帯)となっています。2020年の国勢調査では単独世帯の割合が2015年の34.6%から38.1%に上昇し、親(夫婦、ひとり親)とこどものいる世帯の合計を上回りました。このように一人で暮らす人が増えるなか、地域において日ごろからひとり世帯といかにつながっておくかが重要な課題となっており、さまざまな工夫や取り組みが求められています。

・地域での付き合いの程度が薄くなっている

内閣府政府広報室(2025)によると、令和4年12月の調査において「地域とは付き合いがない」という回答が43.4%にのぼり、過去最高となりました。一方で、「社会のために役立ちたい」という社会への貢献意識を持っている割合は64.3%にのぼっています。このことから、地域とのつながりは弱まっているものの、社会に貢献したいという気持ちは多くの人を持っていることが分かります。地域共通の課題である防災の分野において、こうした意識をどのように活かし、情報共有や協力につなげていくかが重要です。

・防災情報共有には地域や世代による隔りがある

内閣府(2024)の調査によると、令和4年時点で「自然災害への対処について、家族や身近な人と話し合ったことがない」と回答した人は36.9%にのぼりました。その理由を尋ねたところ(複数回答)、「話し合うきっかけがなかった」という回答が58.1%と最も多い結果となりました。このことから、防災について話し合う機会そのものが不足していることが分かります。日ごろから防災に関する会話を増やし、地域や世代を超えて意識を高めていくことの必要性が明らかになっています。



写真 1-1 イベントで遊ぶ子どもたち



写真 1-2 大根を収穫

2. 取り組みに至る経緯

今回、恵水幼稚園が「楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災」というコンセプトのもとに取り組みを始めた背景には、**園・地域・大学が長年にわたり築いてきた関係性があります。こうした基盤のもと、持続可能な社会づくりをめざす教育実践（ESD^{*1}）が展開されてきました。**これらの蓄積により、本事業を無理なく、自然な形で展開することが可能となりました。

2-1. 未来の幼稚園づくりを見据えた園内体制の確立

園では、こどもの経験を起点とした環境づくり・地域連携を中核においた「未来の幼稚園づくり」を掲げ、園内でのカリキュラム改善や職員研修を継続的に行ってきました。

特に、

- こどもが主体的に探究する学び
- 地域の大人との多様なかかわり
- 身近な環境の変化から気づく防災感覚

といった視点を大切にし、保育者が日常保育の中で“対話・観察・気づき”を重視する文化を育ててきました。園内体制の成熟は、本事業において多様な地域団体や大学と連携する際の受け皿として機能し、保育者が外部と協働しながらこどもの学びを支える礎となりました。

さらに園では、教育実践の質を継続的に高めるために、**ESD スケール（OMEP ESD Rating Scale for Early Childhood Education）^{*2}を用いた保育者自身の振り返り**を行ってきました。ESD スケールは、こどもの主体性・対話・多様性の尊重・協働・環境への気づきなどを保育者が客観的に振り返るためのツールであり、恵水幼稚園ではこれを、日々の保育計画の見直し、活動後の振り返り、新たな保育活動への取り組みと結びつけてきました。

この取り組みにより、保育者が「教える側」ではなく、**こどもと共に学ぶ立場として自らの実践を更新する文化**が園内に根づいていったと考えられます。ESD スケールの活用による保育者の気づきは、従来の“訓練型の防災教育”から“関係性・対話を重視する防災への学び”へと視点を広げるきっかけとなり、今回の防災教育事業における活動デザインにも大きく影響を与えています。

^{*1} ESD とは、現在を生きる一人ひとりが自分と他者の生命を大切にしながら、よりよい未来の社会を主体的につくっていく力と姿勢を育む教育である。

^{*2} OMEP（世界幼児教育・保育機構）によって開発された「持続可能な開発のための教育（ESD）の評価尺度」であり、環境、経済、文化の3分野から構成されている。



2-2. ESD・防災教育の研究的蓄積と大学との協働

本取り組みのもう一つの柱は、**複数年にわたる ESD（持続可能な開発のための教育）の実践研究と大学との協働**です。熊本学園大学（吉津研究室）とは4年以上にわたり継続して地域・保育現場と協働し、多世代交流や環境教育、地域協働など幼児教育の枠を超える多分野型の ESD を実践してきました。こうした大学との継続的な協働は、単なる外部支援ではなく、**保育現場と研究者が共に学び合う関係性**として深まり、本事業の基盤を形づくっています。

2-3. 地域の多様な人・組織とのつながりの醸成

恵水幼稚園では、地域住民、自治会、民生委員、コミュニティセンター、地元企業、高齢者団体、消防署など、多様な主体と日常的に交流してきました。この関係はイベント単発のつながりではなく、こどもたちの散歩・行事・自然体験などのなかで、「**顔の見える関係性**」として**積み重ねられてきたもの**です。

この“ゆるやかな日常的つながり”があったからこそ、今回の事業においても、地域の方々がこどもの学びに自然に参加し、多様な知恵や経験を提供していただくことが可能となりました。

2-4. 積み重ねた経験を“防災教育”として統合する段階へ

これまでの ESD、多世代交流、地域協働、環境・エネルギーの学び、防災感覚を育む日常活動といった複合的な実践は、今回の内閣府事業を迎えるにあたり、「コミュニティ防災教育」という形で統合・発展することとなりました。

本事業では、これまでの蓄積を活かしつつ、**こどもが地域の防災に貢献する存在であることを可視化し、“学び合う関係性”を地域全体に広げること**を目指しています。恵水幼稚園が今回の取り組みを実現できた背景には、地道な日常実践と長期的な関係づくりがあり、決して一朝一夕で実現したものではありません。こうした多層的な教育実践と地域との協働こそが、本事業の大きな土台であると考えます。

（文責：吉津晶子）





図 2-1 恵水幼稚園による ESD を用いた防災教育推進モデル

3. ゆるやかなつながりの仕組みづくり

「楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災」を進めていくためには、地域とのつながりづくりが欠かせません。しかし、どのような地域人材と、どのようにつながるかについては、地域ごとに事情が異なります。地域には多様で独自性の高い地域資源が存在しており、一つの方法をそのまま他の地域に当てはめることは難しいのが現状です。

また、人口減少や経済の停滞が進む地域では、予算などの金銭的な資源が不足している場合が多く、地域全体を調整し、つなぐ役割を担うコーディネーターとなる人材が十分に確保できないことも少なくありません。

そこで本取り組みでは、特定の資源や限られた人材に依存して強く結びつくのではなく、共通のコンセプトのもと、地域の人材や組織がゆるやかに、多様性を保ちながら自律的かつ持続的につながるための仕組みを考えました。

3-1. つながりの種類

私たちは、「楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災」というコンセプトに共感してくださる人材や組織とつながることを目指しました。その際に特に大切にしたのが、参加する組織の「分野」と「世代」という視点、さらに組織間の「信頼関係」です。

「分野」と「世代」という視点について、例えば幼稚園同士がつながる場合、同じ分野であり、こどもや保育者といった構成員の世代も近いいため、活動は円滑に進みやすいと考えられます。一方で、価値観が似ていることで、これまでにない発想や未来を見据えた新しい防災教育の手法を生み出すことは難しくなる可能性もあります。

そこで本取り組みでは、同じ教育分野でありながら、構成員の世代が異なる大学に参加を呼びかけました。さらに、異分野の組織として自治体に加え、高齢者を中心に構成される自治会や老人会、民生委員などにもお声がけをしました。その結果、こうした異分野・多世代の組織とつながることで、幼稚園だけでは得ることのできない多様な知識や経験、人的な支援を提供していただけることが分かりました。

これらの地域団体の方々と私たち恵水幼稚園の間には、園・地域・大学が長年にわたって積み重ねてきた信頼関係があります。表 3-1 では、この信頼関係を基盤として本取り組みに参加して下さった組織を一覧にまとめ、コンセプトへの共感の有無などを示しています。



写真 3-1 イベントにおける多世代交流

表 3-1 活動参加組織と理由

組織名（キーパーソン）	分野／世代	コンセプトへの共感	提供資源
熊本学園大学吉津研究室 （吉津晶子教授）	同分野（教育） 多世代	○	保育研究に基づく知見 大学生との交流機会
崇城大学 IoT・AI センター （内藤豊准教授）	同分野（教育） 多世代	○	防災教育アプリ開発技術 大学生との交流機会
熊本市立幸田市民センター	異分野／多世代	○	防災教育イベント共催 備蓄倉庫見学の機会
熊本市消防局	異分野／多世代	○	防災の知識
校区自治会や老人会	異分野／多世代	○	地域の危険箇所の知識 地域の歴史に関する知識 だご汁づくりの知識
地域企業や経済団体	異分野／多世代	○	BCP に関する知識
民生委員	異分野／多世代	○	地域の危険箇所の知識 孤立世帯との連携の知識
防災士や防災 NPO	異分野／多世代	○	防災の知識

3-2. つながる手法

星合(2018)では、多様な組織を無理なくゆるやかにつなげるための多くの手法が提示されています。私たちはその考え方を参考にしながら、本取り組みに適した手法をいくつか選び、下記のとおり言語化しました。その結果、それぞれの分野における専門家である地域団体のみなさんが、自律的に取り組みに参加し、こどもや保育者に対して表 3-1 に示した資源を惜しみなく提供してくれました。

- ・ **参加自由（個々の意思を尊重）**

コンセプトに共感していただいたうえで、個々の意思で本取り組みに参加いただくこと

- ・ **たまに（無理なく日ごろから）**

仕事や家庭の都合でイベントへの欠席や本取り組みからの脱退が認められること

- ・ **対等（もらうとあげる） = Win-Win**

互いに利益となることを積極的に行うこと。例えば老人会の高齢者からこどもに対して過去の災害経験や危険箇所について伝えられた場合、お返しとしてこどもから高齢者や地域に対して、学んだ事柄について絵や発表で伝え、地域に元気を届けること。

- ・ **友達の友達の参加（参加した人から広げる）**

本取り組みへの参加者は取り組みの意義を周囲の異分野・多世代の方々に積極的に広めること。その際ルールについて説明し、本取り組みへの参加に向けた心理的安全性の確保に努めること。

（文責：内藤豊）

4. 全体構造の整理と展開

本章では、これまでに述べてきた「ゆるやかなつながりの仕組みづくり」のもと、ESDの核である「生命（いのち）」を起点に、今回の防災教育の取り組みがどのような全体構造をもち、今後のユニットを基盤としたプロジェクト型保育へと展開していくのかを整理します。

恵水幼稚園ではこれまで、「生命」「食と文化」「自然」「環境」「経済」「地域」といった複数のユニットを基盤とし、こどもたちの関心や生活経験、地域との関わりに応じて学びが循環・発展するプロジェクト型保育に取り組んできました。各ユニットは独立して存在するのではなく、こどもの気づきや問いを起点として相互に結びつき、学びが深まっていく構造をもちています。

今回の防災教育は、こうした実践の流れの中で新たに付け加えられた活動ではありません。**ESDの核である「生命」を中心に、既存のユニット同士の関係性を改めて結び直し、再編・可視化する役割を果たしたものと位置づけられます。**

図4-1は、ESDの核である「生命」を起点として、防災教育の具体的な活動がどのように位置づけられ、今後のユニットを基盤としたプロジェクト型保育へとつながっていくのかを整理したものです。図に示されるように、炊き出し体験、防災マップづくり、暗闇体験、地域との協働といった防災教育の活動は、こどもたちが「自分の命を守ること」や「他者の命を思うこと」について実感を伴って学ぶ機会となりました。これらの経験は、防災に関する知識や技能の獲得にとどまらず、こども一人ひとりの感じ方や判断、他者との関係性に根ざした学びとして積み重ねられています。

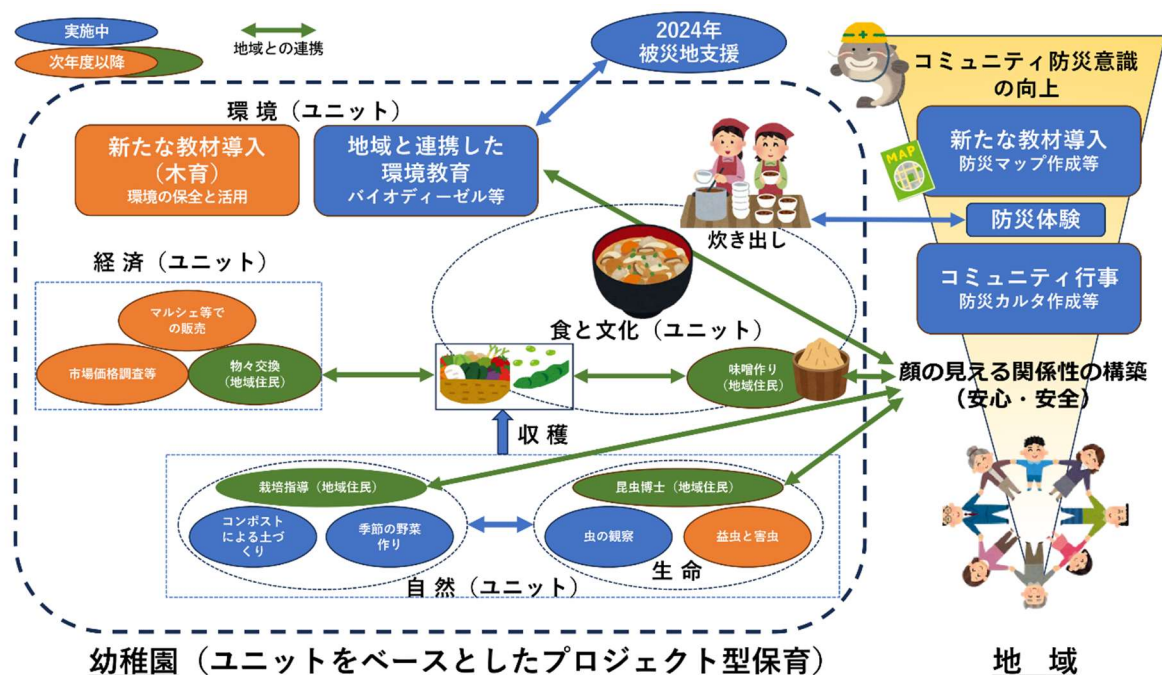




図4-1 ESDの核「生命」を軸とした防災教育の全体構造と、ユニット型プロジェクト保育への接続 (吉津 2026)



こうした学びは、次年度以降、各ユニットを基盤としたプロジェクト型保育へと発展していきます。例えば、炊き出し体験は「食と文化」ユニットにおける探究へ、防災マップづくりは「地域」や「環境」ユニットにおける学びへと接続され、こどもたちの関心や問いに応じて探究が継続・深化していくことが期待されます。

このように、本事業における防災教育は、恵水幼稚園がこれまで培ってきたユニットを基盤としたプロジェクト型保育の延長線上にあり、ESD の核である「生命」を軸として、今後の保育実践をさらに豊かにしていく起点として位置づけられます。

(文責：吉津晶子)

5. 具体的な活動内容

本章では、「楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災」というコンセプトのもとで、恵水幼稚園が進めてきた具体的な活動を紹介します。これらの活動はいずれも、恵水幼稚園が長年大切にしてきた“**ESDの核である生命（いのち）を守る姿勢と、他者のいのちを尊重する心**”を基盤として展開されています。こどもたちが感じた安心・不安・思いやり・判断・協力といった経験は、単なる防災体験ではなく、**自分のいのちと友だちのいのちを守る力を育むESDの学び**として位置づけられます。

5-1. 多世代による炊き出し体験

こどもたちが災害時の食づくりを地域の大人と行うことは、“自分のいのちを守るために必要なことを自分でできる”という力の芽生えにつながっています。また、高齢者や地域の方々と一緒に作る過程では、“他者のいのちを支える温かさ”を肌で感じる機会となりました。

こどもたちは、地域の高齢者や保護者と協力しながら、災害時の食文化の一つである「だご汁」づくりに取り組みました。この活動では、実際に粉をこねる、鍋をのぞき込むといった体験を通して、食づくりの過程を学びました。

粉のやわらかな感触や、鍋の中で具材が煮える音、立ちのぼる温かい湯気や香りなど、五感を使った体験は、こどもたちにとって印象深い学びとなりました。また、高齢者からは、過去の災害時や日常生活の中で、だご汁が人々の体と心を支えてきたことについて話を聞く機会もあり、食と防災、さらに地域の暮らしが深く結びついていることを知りました。

この炊き出し体験を通して、こどもたちは「災害のときでも、みんなで協力すれば温かい食事をつくることができる」という安心感を得るとともに、地域の人と助け合うことの大切さを実感しました。さらに、多世代が同じ場で役割を分担し、声をかけ合いながら活動することで、世代を超えたつながりが生まれ、地域全体で防災について考えるきっかけとなりました。

このように、炊き出し体験は、食文化を学ぶ活動であると同時に、こどもたちが防災を身近に感じ、地域との関わりを深める貴重な学びの場となりました。



保育者の気づき

ほとんどのこどもたちにとってだご汁作りははじめての体験で楽しんでいた。炊き出しという言葉の意味を理解した。災害の時には地域の人と協力して食べ物を作る事を学んだ。命を守るため地域の方と協力し合うことの大切さを学んだ。



写真 5-1 自らの手で粉から作っただごに興味

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：食文化と防災、地域の暮らしが結びついていることへの気づきを深めるため。また、多世代が協力して課題に向き合うことの大切さを学び、災害時に必要となる信頼関係をあらかじめ築いておくため。「あの人を知っているから大丈夫」と思える関係づくりにつながります。
- ・どんな人と：地域のどなたでも連携可能。例えば、地域の高齢者や保護者、学校などの教育機関との連携もおすすめ。
- ・どんなことを：防災食の調理体験に限らず、幼児に人気のお菓子を地域の高齢者と分け合うなど、世代間交流を取り入れることも効果的。
- ・どんなときに：小学校入学前の体験会や地域のお祭りなど、既存の行事のついでに行う「ちょっと防災」として取り入れてみるのはおすすめ。

参考まで、吉津ら(2025)による炊き出し体験を用いた多世代交流における関係性構築のためのカリキュラム試案と検討を次ページの図 5-1 に示します。



写真 5-2 こどもと保育者が地域の高齢者と交流



写真 5-3 こどもが地域の高齢者や企業の方と交流



写真 5-4 おとなたちもだごの調理に興味津々



写真 5-5 保護者や地域の方と災害食として試食



写真 5-6 大学生からインタビューを受けるこども



写真 5-7 保育者が取り組みの趣旨を説明

コミュニティにおける顔の見える関係性構築のための保育カリキュラム試案の実施と検討

吉津 晶子(熊本学園大学社会福祉学部)
 齋山 聖美(幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園)

1. 研究目的

近年、未就学児からの防災レクレーションの重要性が指摘される一方で、体系的な教材や家庭・地域を巻き込んだ実践は十分ではない。本研究では、「食×地域×防災」を統合した保育カリキュラム試案(資料1)を作成し、炊き出し保育を通した試行的実践を行った。その上で、

- 子どもの姿
- 家庭における防災・交流に関する語り
- 地域との関わり

から、試案の有効性と課題を明らかにし、次年度以降のカリキュラム化に向けた示唆を得ることを目的とする。

2. 対象と方法

2-1. 対象
 通常保育内における炊き出し保育(以下、実践)へ参加した年中児44名を対象とした。また、地域からの参加者は民生員1名(男性)、市民センター職員2名(男性)、企業1名(男性)、中学校教頭1名(男性)、放課後デイ施設長1名(女性)、幼稚園理事2名(男性)の計8名(61.4歳±21)であった。

2-2. 方法
 (1)実践において、保育教諭による参加観察を行うとともに、事後に保育カンファレンスを実施した。
 (2)対象児に対し、実践の翌日にお絵描き(教示は「きのうのうしかったこと」のみ)を実施し、前日の活動内容が子どもに印象付けられた可能性についての確認を行った(作品裏面に保育者が描いた子どものつぶやき等を記入)。
 (3)対象児の保護者に対し、実践に関して質問紙法(Google forms)を用い、選択式と自由記述による回答を得た。

3. 倫理的配慮

本研究は、K幼稚園および地域関係機関の協力を得て実施したものである。研究の目的および方法については、保護者に対して文書および口頭で説明、写真等の使用に関する同意を得た上で実施した。アンケートに関する取り扱いについては、匿名化を徹底し、個人情報の保護に努めた。また、本研究を進めるにあたっては、熊本学園大学「人を対象とする研究」に関する倫理指針に則り、教育実践研究としての倫理的妥当性を確認している。

4. 結果

4-1. 通常保育内における実践(炊き出し保育)

4-1-1. 子どもの姿から



「みんなでももろう!のちごぼん」(資料2)をもとに防災を学ぶ姿(写真1)



炊き出し「だご汁」のだごをこねる姿(写真2)



屋外における炊き出し体験(写真3)

4-1-2. 子どものお絵描き作品から

実践の翌日にお絵描きを行った。その際、保育教諭より「炊き出しやだご作り、地域の人をまきましよう」等の教示は行わず、「きのうのうしかったこと」のみ教示している。また描いた作品に対する子どものつぶやき等を裏面に記録として残した。

(1) だご作り・実食(体験)が見られる作品



だごを丸める、だごを茹でる、だご汁を食べる等を作品にしたものが、44作品中21例であった。作品の裏面に残されたメモも「楽しかった」「美味しかった」等の記述が確認できた。

(2) 地域の人(世代間交流)が見られる作品



地域の人と一緒に食べたこと」を描いた作品が44作品中20例であった。同じテーブルについて大人の顔や食事風景の作品が確認できた。さらに「作ったこと」の作品も見られ、様々な形で描かれた「だご」やだごを茹でる寸前風景が確認できた。その背景として、子どものテーブルに一人以上の大人を配置し、食事(給食)と一緒に摂るという環境を整えたこと、さらに、だご作り(粘土あそび)を同じテーブルで支援・見守るという、食事までの時間を共有したことによる影響が窺われる。



地域の方と一緒に食べたこと」を描いた作品が44作品中20例であった。同じテーブルについて大人の顔や食事風景の作品が確認できた。さらに「作ったこと」の作品も見られ、様々な形で描かれた「だご」やだごを茹でる寸前風景が確認できた。その背景として、子どものテーブルに一人以上の大人を配置し、食事(給食)と一緒に摂るという環境を整えたこと、さらに、だご作り(粘土あそび)を同じテーブルで支援・見守るという、食事までの時間を共有したことによる影響が窺われる。

(3) その他



図4: 裏面記録「なし」

実践に関する内容以外を描いた作品が44作品中3例であった。図4と残りの2例は家庭内の出来事を描いていた。図4の作品は、白いクレヨンで画用紙いっぱいにグルグル描きがされていた。保育カンファレンスにおいて、①本日はだご作りをとても楽しみにしていた、②しかし通常保育とは違った人の環境(地域の人)によって混乱してしまい活動に参加できなかった、③その結果の作品ではないかとの意見が出た。

4-2. 保護者へのアンケート結果

実践後、2週間の回答期限を設け、質問紙法(Google forms)によるアンケートを対象児の保護者に対して実施した。その結果、19名(母親18名、父親1名)からの回答が得られた。

項目	回数	割合 (%)
1母親	18	95
2父親	1	5

(1) 「炊き出し保育」について、子どもと話した内容(複数回答)

複数回答によって得られた結果について(表1)に示した。最も多かった回答が炊き出し(だご汁作り)であり、次いで災害(地震や台風)についてであった。世代間交流と関係する「地域の方々と交流」については、他の2つの項目と同じ回数3(16%)であった。

項目	回数	割合 (%)
1災害(地震や台風)について	8	42
2防災について	5	26
3炊き出し(だご汁作り)	16	84
4地域の方々と交流	3	16
5自分の命を守る上	1	5
6みんなで助け合うこと	3	16
7温かいご飯を大切にすること	3	16

(2) 子どもと話した内容(自由記述)

自由記述において子どもと話した内容について3つのカテゴリ「災害・防災に関する学び」「だご汁作り」と「地域との交流」に分け、以下に整理した(表2)。ここでは、高齢者との交流の内容など、前項の選択式回答に関連する世代間交流の具体的な事例が記述として示されている。

表2 記述の例

災害・防災に関する学び

- 熊本地震の時の体験談(みんなで協力してご飯を準備したこと)や避難所の利用方法の説明、どうしたら炊き出しをするのかについて。
- 後日実施したマンションの避難訓練では消火器噴射演習を積極的に学んでいました。
- 災害の時は食べるものがなくなって、給食みたいに作ってもらって食べることがあるんだよ、温かいご飯が食べられることはありがたいことなんだよ、好き嫌いはいけなくて、など話をしました。
- 災害の時に炊き出しをしてみんなで作って食べて話してくれました。
- 津波のことを話していました。

だご汁作り

- たんごは丸く作って、おじいちゃんおばあちゃんを作ってくれたから野菜も美味しくだご汁全部がおいしかった、と言っていました。お野菜は苦手ですが、美味しく食べられたよ。
- 団子を自分の好きな形につくったりお友達と一緒にできたことが楽しかったと話してくれました。
- 「炊き出しは美味しかったか、楽しかったか、」などを。
- 「だご汁が美味しかったとお話してくれました。

地域との交流

- 外の炊き出しについてと地域の方々と話をしたと聞きました。
- たご汁作りを楽しんだ事や、地域の方々とご飯やお話をした事を教えてくれました。
- おじいちゃんおばあちゃんとお話してだご汁がおいしかった。良かったと話していました。

【脚注】アンケートの作成及び実施においてお世話になった京都教育大学の田所実二教授に感謝申し上げます。

本研究に関して、開示すべきCOI関連事項は存在しない。本研究は内閣府令和7年度コミュニティ防災教育推進事業の助成を受けている。

5. 考察

5-1. 通常保育内における実践(炊き出し保育)から

本実践は、新カリキュラムに位置づけられる「食・地域・防災」を統合した活動として行われた。お絵描き結果では、だご作りや実食など身体感覚を伴う経験が21例と多く描かれ、温かさ・楽しさ・美味しさなどの感情語が記されていた。これは、子どもにおいて体験的要素が防災の理解に強く結びつくことを示す。また、地域の人と一緒に食べた場面を20例が描いた点から、子どもは「誰と活動したか」という関係性を認識していたことが分かる。同じテーブルで調理過程を共有するなどの環境調整は、子どもに「顔の見える関係性」を具体的に感じさせる効果をもたせられる。

一方、地域の子の存在に戸惑い活動に参加できなかった子どももあり、人的環境の急激な変化への発達の配慮が必要であることも示唆された。

5-2. 保護者へのアンケート結果から

自由記述では、選択式回答では見えなかった「家庭での防災の語り」が複数確認された。過去の保護者の災害経験を子どもと共有したり、学んだ「炊き出しの意味」「温かい食事のありがたさ」を話した子どももおり、本実践が家庭で防災の話を契機を生まみ出していたことが分かる。さらに「地域の方と話した」「おじいちゃんおばあちゃんといっただご汁の語りも見られ、子どもが経験した世代間交流が家庭で肯定的に共有された点は、コミュニティ連携型カリキュラムの意義を支持されると考えられる。ただし、回答者が19名に留まったことや、保護者の災害経験の差が語りの深さに影響した可能性は考慮する必要がある。

6. 課題と展望

【課題】

1. 地域参加に不安を示す子どもへの個別支援
 人的環境の変化による混乱が一部に見られ、事前の関係づくりや選択的参加などの環境調整が求められる。
2. 実践における防災対話の継続支援
 保護者の災害経験の差異を踏まえ、語りを補助する資料やワークの整備が必要である。
3. 活動の系統化と年間カリキュラム化の不足
 単発的活動に留まっており、食・地域・防災を体系的に関連づける学習設計が未整備である。

【展望】

1. 地域交流の段階的導入
 顔合わせ → 小集団活動 → 共同調理・食事と段階的にかかわりを深化させ、安心して交流できる環境を構成する。
2. 家庭と連携した防災学習の構築
 炊き出し経験が家庭の語りにつながるよう、家庭向けの対話支援ツールを開発し、園・家庭・地域の三者協働を強化する。
3. 年間カリキュラムへの再構築
 だご汁作り、屋外炊飯、地域交流、防災理解を連続的に学べるよう、年間を通したESD型カリキュラムとして組み直す。
4. 地域関係ネットワークの固定化
 民生委員、市民センター、企業、小中学校等と継続的に協働し、「顔の見える関係性」を日常的に維持する体制をつくる。
5. 2026年度への展望
 今回の実践をもとに、新保育カリキュラムとして正式導入し、園・家庭・地域の協働による防災教育モデルの確立を目指す。

図 5-1 吉津ら(2025)による炊き出し体験を用いた多世代の関係性構築のためのカリキュラム試案と検討結果

5-2. 避難場所と防災施設の体験学習

こどもたちは、地域にある避難場所や公的避難所、消防署を実際に訪れ、防災に関わるさまざまな施設を見て回りました。この活動では、「誰が、何のために、どのように地域を支えているのか」という視点を大切にしながら、施設の役割や働く人々の姿を観察しました。

避難場所や避難所では、災害が起きたときに多くの人が安全に集まり、助け合いながら過ごす場所であることを学びました。また、どのような備えがされているのか、普段はどのように使われているのかについても、実際の設備を見ながら気づきを深めました。

消防署では、消防士の方々と直接話をする機会を設け、災害時の仕事や日ごろの訓練について教えていただきました。消防士との対話を通して、火事や災害が起きたときだけでなく、日常の安全を守るためにもさまざまな活動をしていることを知り、こどもたちは地域を支える仕事への関心を高めていきました。



保育者の気づき

体験学習以降、園内での避難訓練時や日ごろの天気や気温の変化に敏感になった。警報が聞こえると手で口を覆う等、災害に応じて自ら考えて避難の方法を実践する姿が見受けられ、防災への意識の高まりが感じられた。

園外での活動時に、避難所のマークを見つけてこども同士で共有していた。避難所訪問時に「あそぶものがない」と指摘していた。



写真 5-8 避難場所（熊本市施設）を見学



写真 5-9 消防署を見学し災害時の行動を学ぶ



写真 5-10 避難場所の周辺をお散歩



写真 5-11 見てきたことや感じたことを発表

この体験学習を通して、こどもたちは防災施設が身近な場所にあり、多くの人の支えによって成り立っていることを実感しました。また、「いざというときにどこへ行けばよいのか」「誰が助けてくれるのか」を知ることで、災害への不安を和らげるとともに、地域の一員として防災を考える意識を育む機会となりました。

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：万一の時に頼りになる施設を訪れ、道順や防災機能を前もって知っておく。
- ・どんな人と：避難場所として指定されている公共施設で、あるいは消防署など緊急時に活動する施設で、日ごろから災害対応の準備をしている人。
- ・どんなことを：普段は別の用途で使われている施設が、災害時には避難場所として「役割を変える」ことを学ぶ。また緊急時の活動や訓練内容について気づきを深める（こどもたちには「へんし〜ん！」と伝え、楽しく理解が深まります）。
- ・どんなときに：お散歩コースに迷ったときや、いつもの活動に少し変化をつけたいときに。

5-3. 防災マップづくりと安全ウォーク

防災マップづくりでは、単に「危険・安全」を見つけるだけでなく、“もし友だちが困っていたらどう助けるか”“どこへ行けば皆が安全か”といった、**他者のいのちを思う心が自然に表れています**。こどもたちの判断には、ESD が育んできた“いのちを中心にした感性”が見られました。

こどもたちは、園の周辺を実際に歩きながら、「安全な場所」「危険だと感じる場所」「困ったときに助けてもらえ

る場所」を自分たちの目で探しました。活動の中では、道の広さや段差、川や用水路の位置、建物の様子などにも注目し、日常の風景の中にある防災の視点に気づいていきました。

見つけた内容は、写真や絵、記号、初期書字などを自由に組み合わせながら、こども一人ひとりがオリジナルの防災マップとして表現しました。「ここはあぶない」「ここはにげられる」「ここには人がいる」といった思いが、こどもなりの言葉や形で表され、表現の方法にも多様性が見られました。

防災マップの中には、坂道や低い場所といった地形の特徴、避難所の場所、食料や毛布などの備蓄がある施設、災害時に通れる道・通れない道の判断などが描き込まれていました。これらは、単なる地図づくりにとどまらず、「どこへ行けば安全か」「誰と一緒に行動するか」といった、こども自身による意思決定の過程が表れたものでもありました。



保育者の気づき

防災マップには避難所や山、川などの災害リスクのある物に加えて、スーパーや薬局といった災害時に役立つ施設をこどもたちが自ら記入していた。

こどもたちは、単なるマップではなく、台風や地震、津波の際にどのように行動するかを議論し、行動指針として盛り込んでいた。



写真 5-12 防災マップのイメージをインプット

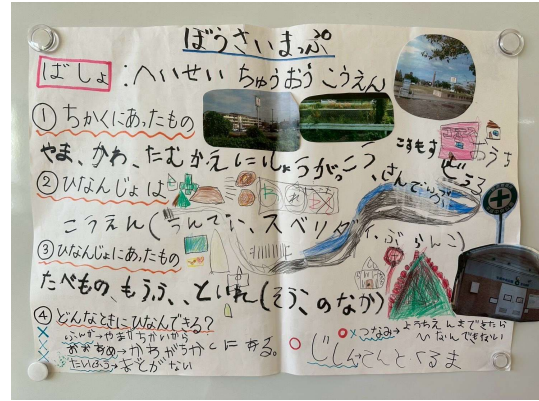


写真 5-13 こどもによる防災マップ

この活動を通して、こどもたちは身の回りの環境を防災の視点で捉える力を育むとともに、「自分や友だちを守るためにはどうすればよいか」を考えるようになりました。防災マップに表れた表現からは、空間認識や概念形成の発達に加え、他者を思いやる気持ちや判断の根拠を考える姿勢など、倫理性の芽生えも可視化されました。

このように、防災マップづくりは、こどもたちが主体的に考え、感じ、表現することを通して、防災を自分ごととして捉える大切な学びの機会となりました。

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：こどもが身近な地域を防災の視点で見直し、安全に行動する力や判断力を育む。
- ・どんな人と：町内自治会をはじめとする地域団体の方々、日ごろから関わりのある地域の大人。
- ・どんなことを：園周辺を歩いて「安全・危険・助けてもらえる場所」を探し、絵や写真、記号などで防災マップを作成。
- ・どんなときに：お散歩や園外活動など、いつもの活動に少し防災の視点を加えたいときに。

5-4. 暗闇体験とエネルギー探究

暗闇体験は、こどもにとって「いのちの不安」を体験し、そこから「安心を生み出す工夫」に気づく大切な機会であると考えられます。この活動は、防災教育でありながら、“安心をつくる力”といういのちに寄り添う学びとして位置付けられます。

停電を想定した暗闇体験では、こどもたちは大きな段ボール

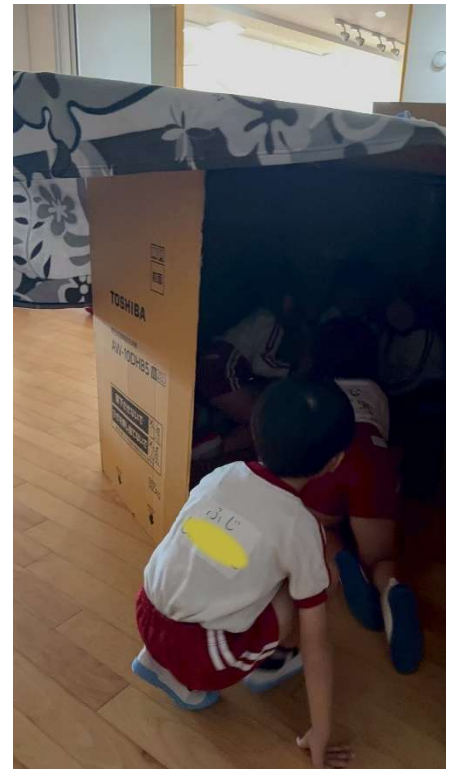


写真 5-14 段ボール箱にもぐり込み暗闇を体験

ル箱の中に入ること、普段とは異なる暗い環境を体験しました。こどもたちは、突然の環境の変化に戸惑いながらも「こわい」「どきどきする」「少し安心した」など、自分の気持ちの変化について語り合いました。この体験を通して、暗闇が不安な気持ちを生みやすいことや、光があることで心が落ち着くことを実感しました。

暗闇体験のあとには、光のワークショップを行いました。ワークショップでは、停電時に役立つ工夫として、水を入れたペットボトルの底に懐中電灯を当てると、光が周囲にやさしく広がることを試しました。強い光ではなく、周囲を照らす柔らかな明かりが、安心感につながることを体感し、こどもたちは「くらくてもくふうすればだいじょうぶ」という気づきを得ました。

こうした活動を通して、こどもたちは「安心」と「エネルギー」が暮らしの中でどのように関わっているのかを学んでいきました。

さらに、園で取り組んでいる廃油を回収し、バイオディーゼル燃料を作って幼稚園バスを運行する活動についても学習しました。使い終わった油が、新たなエネルギーとして生まれ変わり、人の役に立つことを知ることで、エネルギーを大切に使うことや、持続可能な暮らしへの関心が高まりました。

このように、暗闇体験とエネルギーに関する学びを組み合わせることで、こどもたちは災害時の備えだけでなく、日常の暮らしと防災、さらに未来につながるエネルギーの大切さについて、実感を伴って気づきを深めることができました。



保育者の気づき

廃油の活用など、身近な物も再利用することで災害時に役立てられる場合があることを学んだ。

バイオディーゼルはじめエネルギーに関する知識や、ペットボトルを使った光の拡散など、科学的根拠に基づいた防災保育の実践につなげていきたい。



写真 5-15 光のワークショップの様子



写真 5-16 ペットボトルで簡易防災ライトを作成中



写真 5-17 簡易防災ライトを点灯

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：停電時の不安な気持ちを体験的に感じ取り、工夫によって安心を生み出せることを学ぶ。
- ・どんな人と：こども、保育者、保護者など、身近な大人と一緒に。また防災士やアイデア豊かな方もおすすめ。
- ・どんなことを：暗闇体験を通して気持ちの変化を共有し、懐中電灯とペットボトルを使った簡単な明かりづくりや、エネルギーの循環について学ぶ。
- ・どんなときに：防災学習の時間や、環境・エネルギーについて考える活動の一環として。

5-5. 備蓄倉庫から学ぶ

こどもたちは、地域にある備蓄倉庫を見学し、非常食や飲料水、毛布など、大量の備蓄物資が保管されている様子を実際に見ました。普段は目にすることのない量や種類の多さに驚きながら、災害に備えて準備が行われていることを知りました。

この見学を通して、こどもたちは「いざという時のために、地域の誰かが前もって準備してくれている」ということに気づきました。また、防災は一人で行うものではなく、多くの人が役割を分担しながら地域全体を支えていることを理解していきました。

備蓄倉庫の見学は、こどもたちにとって安支え合うことの大切さを学ぶ機会となりました。

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：地域で災害に備える仕組みや、見えないところで支えている人の役割を知る。
- ・どんな人と：こども、保育者、地域団体や自治体の担当者など、身近な大人と一緒に。



写真 5-18 備蓄倉庫を見学



写真 5-19 うずたかく積まれた備蓄物資

- ・どんなことを：備蓄倉庫を見学し、どんな物資が、誰のために、どのように準備されているのかを学ぶ。
- ・どんなときに：防災学習の一環として、地域探検や園外活動の機会に。

5-6. 非常食と食文化

こどもたちは、パックご飯や缶詰などの非常食に実際に触れながら、その特徴について学びました。非常食は「保存がきく」「災害時でもすぐに食べられる」といった点が大きな役割であることを知り、普段の食事との違いにも気づいていきました。

また、給食の時間を利用して、自分の手でおにぎりをにぎり食べる体験をしました。おにぎりをにぎるなど自らできることを増やすことで、非常時に自らの命を守ることに役立つことを学びました。

この活動で、非常時であっても食事をとることが、体だけでなく心の安心につながることを学びました。非常食について知ることを通して、災害への備えと食文化の大切さについての気づきを深める機会となりました。

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：災害時の食事の特徴を知り、食べることが安心につながることに気づく。
- ・どんな人と：こども、保育者、保護者など、身近な大人と一緒に。
- ・どんなことを：パックご飯や缶詰などの非常食を見たり触れたりしながら、保存性や食べやすさについて学ぶ。
- ・どんなときに：防災学習の時間や、日常の食育活動の一環として。



写真 5-20 お水や非常食を防災バッグに入れる



保育者の気づき

おにぎり作りから防災食への興味が生まれ、防災への関心が高まった。
自分の手でおにぎりを握る楽しさや食への感謝の気持ちが高まった。



写真 5-21 おにぎりを自分でにぎって食べる

5-7. 幼児向け防災教育アプリ体験

こどもたちは、大学生と連携して開発した幼児向け防災教育用スマートフォンアプリを活用し、地震などの非常時に実際に鳴る警報音を聞きながら、クイズ形式で楽しく学習しました。

このアプリは、事前に行われた大学生による2回のヒアリングを通して、ボタンの色や配置などにこどもたちの意見を反映させて開発されたものです。活動では、警報音の違いに耳を傾け、「いつもと違う音」に気づくことの大切さを体験的に感じ取りました。

こどもたちは、警報音が聞こえたときに、どのような行動をとると安全につながるのか、例えば、津波と水害に関しては絵を見るだけで「高いところに避難しないと！！」「屋根の上にはいかないといけない」というように具体的な行動についても発言ができていました。

この体験を通して、こどもたちは非常時の音と行動を結びつけて考える力を育み、防災を身近なものとして捉えるきっかけとなりました。



保育者の気づき

日ごろ学んでいる火災、地震、津波という災害を表す言葉を、アプリを通して再確認していた。
アプリに次々と正解していくとともに、なぜ間違っているのかまで言葉にして説明することができていた。
「この音は●●のとき」と言葉で伝えられるようになった。



写真 5-22 スマートフォン用ウェブアプリを開発



写真 5-23 スマートフォンの扱いは手慣れたもの



写真 5-24 ベトナムからの留学生から学ぶ



写真 5-25 警報音に驚きながらクイズに回答

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：非常時の音に気づき、適切な行動をとる力を楽しみながら身につけるため。
- ・どんな人と：こども、保育者、大学生など、世代の異なる人と一緒に。
- ・どんなことを：幼児向け防災アプリを使い、警報音を聞き分けたり、その音に応じた行動を確認したりする。
- ・どんなときに：防災学習の時間や、ICTを活用した遊びの活動として。

5-8. キッズ防災士認定

キッズ防災士の認定は、こどもが“地域のいのちを守る担い手”としての責任感や誇りを感じる貴重な機会となりました。これは、恵水幼稚園がESDの枠組みで大切にしてきた「いのちを守り、他者を思いやる心」の育ちが可視化された瞬間であると考えられます。

これまで炊き出し体験や防災施設の体験学習といったさまざまな活動に取り組んできたこともたちに対して、防災教育を実施するNPOの講師からキッズ防災士認定書が交付されました。災害に備えた日ごろの準備について学ぶとともに、災害が発生した際に自分の身を守るためのとっさの行動や避難について考え、語ってきた経験を象徴するものです。

さらには、災害時には、高齢者や障がいのある人など、孤立してしまう可能性のある地域住民の方がいます。そうした人たちに対して、こどもとしてどのような関わりや行動ができるのか、無理のない範囲で何ができるのかを考えることは重要です。

こどもたちは、今後も継続して防災活動に取り組み「キッズ防災士」として、自分たちが防災の担い手の一員であるという自覚と誇りを持ってくれることでしょう。

<みなさんの活動へのヒント>

- ・何のために：災害時に自分の身を守る行動を学び、周囲の人を思いやる防災意識を育むため。



図 5-2 幼児向け防災教育アプリの画面
避難の際に持ち出すものを問うクイズ



写真 5-26 認定書の授与

- どんな人と：こども、防災教育を行う NPO の講師や自治体の防災担当者、保育者、保護者などと一緒に。
- どんなことを：とっさの身の守り方や避難行動を学び、孤立しやすい人への関わりについて考える。
- どんなときに：防災週間や行事、防災学習のまとめとして。



保育者の気づき

こどもたちは防災士の話に興味を持ち、積極的に自分の考えを発言していた。「もしも～だったらどうする？」と問い掛け、こども自身が考え、言葉にする機会を設けることで、災害時の行動について自分なりに考えようとする姿勢が育っていた。活動後に、日常生活の中で防災に関連する話題を出すこどもが増えた。

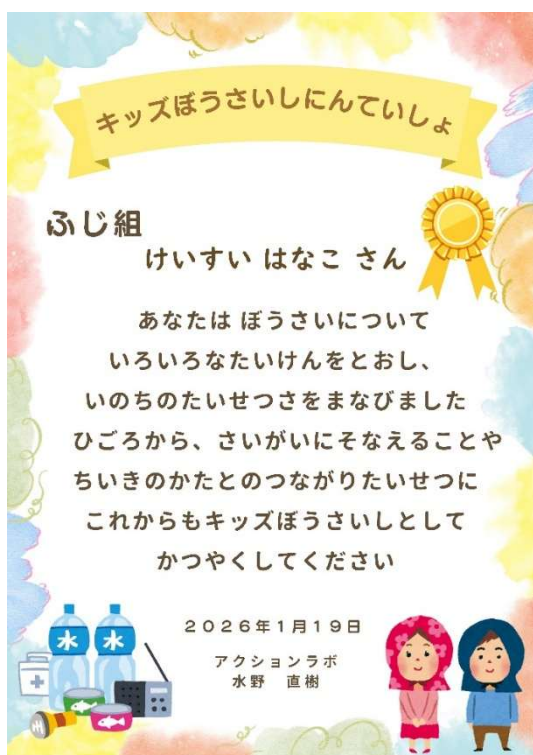


図 5-3 キッズ防災士認定書

6. 取り組みを通して見られた変化

本取り組みを通して育まれた判断力・表現力・思いやりは、すべて“いのちにかかわる学び”として解釈できます。子どもたちは、防災を通して**自分と他者のいのちのつながりに気づき始めている**と考えられます。

・ 防災を「怖いもの」ではなく「助け合うもの」と捉える子どもが増えた

体験的な学びや多世代との交流を通して、災害を単に怖い出来事として捉えるのではなく、「みんなで助け合うことで乗り越えるもの」として考える子どもが増えました。防災が日常の延長にある身近なものとして受け止められるようになったことが、大きな変化として見られました。

・ 思いやり、判断力、表現力が育った

防災マップづくりや対話、発表の機会を通して、自分だけでなく他者の安全を考える思いやりの気持ちが育まれました。また、「どこが安全か」「どう行動するか」を自分なりに考える判断力や、感じたこと・考えたことを絵や言葉で伝える表現力の広がりが見られました。

・ 保育者が「訓練型」から「関係・対話型のESD」への視点転換を経験

従来の避難訓練を中心とした一方向的な防災教育から、子ども・家庭・地域との関係性や対話を重視した ESD（持続可能な開発のための教育）としての防災教育へと、教員自身の視点が広がりました。防災を通して学びを深める教育の可能性を実感する機会となりました。

・ 家庭・地域とのつながりが強まり、幼児の社会的役割への認識が広がった

保護者や地域団体との協働により、家庭や地域とのつながりがこれまで以上に強まりました。その中で、子ども自身が「地域の一員」として認識され、幼児であっても地域において役割を担う存在であるという意識が、子ども・大人の双方に広がりました。また、防災を「怖いもの」ではなく「助け合うもの」と捉える子が増えました。

7. これからの展望

今後の展望としては、本取り組みを通して防災に関する知識や体験、判断力の経験を重ねた子どもたちが、保護者や保育者、自治体、地域の人々からの継続的な支援を受けながら、防災教育の担い手として成長していくことを期待しています。子どもたちは、学んだことを家庭や地域で伝えたり、行動で示したりすることで、防災の大切さを周囲に広げていく存在となっていくでしょう。

また、子どもを中心とした防災の取り組みが、家庭や地域に新たな対話や協力を生み出し、世代を超えた学び合いにつながることも期待されます。幼児であっても、身近な大人に支えられながら役割を担う経験を重ねることで、自信や主体性を育み、地域社会の一員としての意識を高めていくと考えられます。

例えば、大学生と連携して開発した幼児向け防災教育スマートフォンアプリの体験では、一部の子どもが短時間で操作に慣れる姿が見られました。今後さらに体験を重ねることで、操作に習熟した子どもが、地域の高齢者や外国人に対して講師役を務めるといった新たな役割を担うことも期待されます。今回アプリを開発した大学生には、全国の子どもたちに防災教育の担い手となってもらうために本アプリを提供することを約束いただいています。また、すでに北海道の高校生からアプリ活用に関する相談が幼稚園に寄せられています。

このように、こどもの経験を起点とした防災教育が継続的に展開されることで、幼稚園は学びの場にとどまらず、地域とともに育ち合う防災の拠点として機能していくことを目指します。

今後も、子どもたちが自分のいのちを守り、他者のいのちを思いやる経験を園・家庭・地域・大学が連携して支えていくことが重要です。さらに本事業を通して育まれた「いのちの学び」を、地域全体に循環させていくことが今後の大きな目標です。

参考文献

- 星合隆成 (2018) つながり科学する 地域コミュニティブランド, 木楽舎
- 内閣府 (2024) 令和 6 年版防災白書
- 内閣府 (2025) 令和 7 年版防災白書
- 内閣府 (2026) 防災立国推進閣僚会議, https://www.bousai.go.jp/kaigirep/suishin_kaakuryou/index.html
- 内閣府政府広報室 (2025) 「社会意識に関する世論調査」の概要
- OMEP (2019) The OMEP ESD rating scale 2 ed., https://omepworld.org/wp-content/uploads/2023/06/2019-OMEP-ESD-rating-scale2ed.ENG_.pdf
- OMEP 日本委員会 (2022) 世界 OMEP の ESD Rating Scale (ver.2)日本語訳, <https://www.omepjpn.org/>
- 吉津晶子, 鷲山聖美 (2025) コミュニティにおける顔の見える関係性構築のための保育カリキュラム試案の実施と検討, 日本世代間交流学会第 16 回全国大会



巻末資料

恵水幼稚園指導者ほか作成 指導案および報告書

防災保育の指導に関する報告書【未満児】

防災保育の指導に関する報告書【年少】

防災保育の指導に関する報告書【年中】

防災保育の指導に関する報告書【年長】



防災保育の指導に関する報告書【キッズ防災士認定式および光のワークショップ】

防災保育の指導に関する報告書【防災アプリ体験日】

山の保全および防災の視点から国内産木材を活用した木育教材開発を進めている先進事例視察報告書

木育おもちゃ・奈良おもちゃ美術館視察報告書

幼児向け防災教育アプリを用いたワークショップ報告書



防災保育に関する報告書（未満児）

「防災食体験」

1. 目的

本報告書は、幼稚園において実施した防災保育の取り組みについて、その内容および成果、課題を整理し、共同研究機関である大学との研究資料として共有することを目的とする。また、幼児期における防災意識の形成や行動特性について検討し、今後の防災保育の充実に資する知見を得ることを目指す。

2. 実施期間

令和7年10月17日(金) 「防災食体験日」

令和7年10月24日(金)・11月14日(金)・11月21日(金)「避難場所お散歩ツアー」

3. 対象

- 実施園：恵水幼稚園
- 対象年齢：未満児
- 在籍人数：69名

4. 保育内容

(1) ねらい

- 防災食を体験することで親しみを持つ。
- 避難時の際、衛生を守れる行動に気付く。
- 災害発生時、命守るために安心できる人や場所を見つける。

(2) 具体的な活動内容

- 防災食「おにぎり」作り
- 手洗い指導
- 近くの避難場所へお散歩体験 近くの避難場所へお散歩体験

- 防災看板探し

5 参考資料



6. 指導方法・配慮事項

- 子どもが不安を感じないように、事前に分かりやすい言葉で伝えた。
- 普段の給食から防災食へ関心に結びつけられるよう声掛けを行った。
- 園外散歩では安全面を確保し、職員間での連携に努めた。

7. 子どもの変化・子どもの様子

- おにぎり作りから防災食への意識が身に付き、自分の手でおにぎりを握る楽しさや食への感謝の気持ちが高まった。
- 公園で看板は見つからなかったが、園外にも様々な表示や看板があることに気付いた。

8. 課題・反省点

- おにぎりに抵抗があり、自分で握ることに難しさを感じた。保育教諭が寄り添いながら安心して取り組むことが出来るようサポートすることで、おにぎりを握ることが出来た。また、ただ“避難食”といった言葉で伝えるのではなく、避難時には誰かの命を救うことが出来ることを伝えるとより理解が深まったのではないかと感じた。
- 公園へお散歩に行ったが、看板が見つからなかった。周りのことに目が向いてしまう子どもが多い中、子どもの安全を確保しながら、看板がどのよ

うなものであるのか、どのような目的があるのかを伝えることに難しく感じた。

9. 今後の改善・対応策

- 日常の保育の中でも防災や衛生に触れる機会を設け、段階的に理解を深めていく。
- 園外へ出掛ける際には、事前に情報を収集することで、短時間で集中して子どもたちが取り組むことが出来るよう努める。

10. まとめ・考察

本取り組みを通して、園児が災害時の行動について具体的なイメージを持ち、積極的に参加する姿が見られた。発達段階において言葉の理解が難しい場面もあったが、年齢に応じて子どもたちが分かりやすい言葉で伝えたり、普段の園生活から避難に関心を向けることが出来るよう段階を経ることでより理解が深まった。

今回の活動を機に、普段の生活から避難を想定した活動を取り入れ、準備を行うことが必要だと感じた。

以上

令和7年12月25日 実施園：恵水幼稚園

幼稚園 担当者：堤 玲衣奈

防災保育に関する報告書（年少児）

1. 目的

本報告書は、幼稚園において実施した防災保育の取り組みについて、その内容および成果、課題を整理し、共同研究機関である大学との研究資料として共有することを目的とする。また、幼児期における防災意識の形成や行動特性について検討し、今後の防災保育の充実に資する知見を得ることを目指す。

2. 実施期間

- ・令和7年10月17日(金) 「防災食体験」
- ・令和7年12月18日(木)・22日(月) 「アプリ開発」
- ・令和8年1月16日(金) 「防災アプリ体験保育」

3. 対象

- 実施園：恵水幼稚園
- 対象年齢：3歳児
- 在籍人数：63名

4. 保育内容

(1) ねらい

- 災害時に自分や周囲の命を守ることにについて、日常の経験を通して考えるきっかけを持つ。
- 防災食に親しむ。
- 「防災音」を知り、音の違いに気付く。

(2) 具体的な活動内容

- 防災食「おにぎり」作り
- 崇城大学コラボ保育「防災音当てクイズ」

5 参考資料



6. 指導方法・配慮事項

- 防災食とは何かを考え、災害時の食事について興味を持てるようきっかけ作りを行った。
- 崇城大学の学生さんの言葉や説明を子どもたちに分かりやすく、簡潔に伝えるように学びのサポートを行った。
- キーワードとなる火災、津波、地震などを復唱して伝えた。

7. 子どもの姿・子どもの様子

- 家庭でも実践してみようとする子どもの様子があった。
- 自分で作って食べることで完食につながっていた。
- 火災、地震、津波の言葉を自然と覚えていた。
- 日頃の避難訓練を振り返りながら活動に活かしていた。

8. 課題・反省点

- 防災食について、おにぎりだけでなく様々な食事があること気付けるよう子どもの考えを広げていきたい。

- 年少：災害という言葉聞いてのイメージあまりなかったため、災害について説明やなぜ、この活動をしているか年齢やこれまでの経験によって受け止め方に違いが見られた。
- 年中：これまでの避難訓練や地震などの経験を経て、災害について知っていることや地震や火災があることなど個人差はあったが、たくさん発言する姿があった。
- 年長：音に対するイメージや災害に対するイメージも赤色やピンク色などと同じ意見の子どもたちの姿が多く見られた。ボタンを押すクイズも何を当てればいいのか考えながら取り組んでいた。

9. 今後の改善・対応策

- 防災食を学ぶと共に、地域とのつながり・連携を継続することの必要性を感じた。
- 開発されたアプリを使った体験保育では、学生側・保育教諭の事前の打ち合わせや子どもとの関わり方などを共有しておくことが大切だと考える。
- まずは、活動の導入・意義を子どもたちに伝えることが大切だと考える。

10. まとめ・考察

防災食試食体験

・本取り組みを通して、防災食の一つである「おにぎり」を作って食べることで、災害時に備える大切さが子どもたちの中に入っていった。例年行っている内容にはなるが、どのような意図で行っているかを毎年、伝え続けていきたい。

・本取り組みを通して、幼児が災害の種類について自分なりに考えようとする姿が確認された。日頃から行っている避難訓練やテレビのニュースで知りえた情報などから関連付けて発言したり、活動に参加したりする姿が見られた。音やボタン、クイズなどには興味をもって、積極的に参加したり、子ども達それぞれが意見を出す姿が見られた。今後は、大学との共同研究を通して、年齢差による学び

の深さに違いが見られたため、指導方法の工夫について継続的に検討し、子どもが主体的に学ぶことのできる防災保育の実践につなげていきたい。

報告日：令和7年12月25日

実施園：恵水幼稚園

幼稚園 担当者：久米 百花

防災保育に関する報告書（年中児）

1. 目的

本報告書は、幼稚園において実施した防災保育の取り組みについて、その内容および成果、課題を整理し、共同研究機関である大学との研究資料として共有することを目的とする。また、幼児期における防災意識の形成や行動特性について検討し、今後の防災保育の充実に資する知見を得ることを目指す。

2. 実施期間

令和7年10月28日（火）

3. 対象

- 実施園： 恵水幼稚園
- 対象年齢： 4歳児（年中児）
- 在籍人数： 54名

4. 保育内容

(1) ねらい

- 災害時の「炊き出し」を体験し、防災について考えるきっかけを持つ。
- 地域の方と協力し、災害時に自分が出来る事を考える。
- 防災への意識を高め、命を大切にする気持ちに気付く。

(2) 具体的な活動内容

- 炊き出し体験「だご汁」作り
- 地域交流、多世代交流

5 参考資料



6. 指導方法・配慮事項

- パワーポイントにて災害を振り返り防災について触れていく。地域との協力や炊き出しについて更に触れ活動への学びを支える。。
- 地域、多世代の方をお客様で園へお招きし、協力し合う事や一緒に体験を味わう事で地域の方とつながる大切さに気付けるよう見守る。
- だご汁を実際に作り体験する。

7. 子どもの姿・子どもの様子

- だご汁作りを体験し、楽しむ様子があった。炊き出しの食べ物を知り、防災食に関心を持つ姿があった。
- 災害の時には地域の人と協力して食べ物を作ったりする事に気付く姿があった。
- 命を守る為には地域の方と協力し合う大切さに気付く発言があった。

8. 課題・反省点

- 地域、多世代の方と携わる事がとても楽しかったとの感想があった。日頃より、地域の方との触れ合える環境作りも大切な事を子どもから学んだ。
- 園では防災食を実際に作った事がなかったので、子どもに様々な体験をし、学べる機会を大切に今後も取り組みたいと思う。

9. 今後の改善・対応策

- 園で取り組んでいる避難訓練や防災に関する事等を見直し、新たに必要な訓練や想定する行動を子どもと共に考えていく。
- 地域の方と沢山触れ合いながら体験を自然と実践に繋げていけるような環境作りが大切だと思う。
- 命を守るためには色んな方法がある事を子ども達に伝えていく必要がある。

10. まとめ・考察

本取り組みを通して、子ども達は災害に対する新しい知識を地域の方と一緒に学ぶ事が出来ていた。園では実際に炊き出しに触れた事がなく、「だご汁」を作る体験を通して、楽しさを感じながら作り方に気付く姿があった。その気付きには、地域の方がいることで更に楽しい雰囲気と協力する大切さを体験しながら体験することができた。子ども達なりの知識で、災害が起きた時にはどのような行動が出来るのかという部分では、地域の方と協力して、炊き出しを行い、命を守り、「助け合う」という大切な部分を感じていた。災害時に「どうしたらいいかな」「ここは安全かな」と考え行動しようとする姿が見られ自分の考えを伝える姿があった。

今後も日頃の活動から、地域の方に触れる体験を増やし、様々な体験、経験をしながら災害時にでも自然と行動できるよう、活動・取り組みを大切にしていきたいと思う。

令和7年12月25日 実施園：恵水幼稚園

幼稚園 担当者：地下麻実

防災保育に関する報告書（年長児）

1. 目的

本報告書は、幼稚園において実施した防災保育の取り組みについて、その内容および成果、課題を整理し、共同研究機関である大学との研究資料として共有することを目的とする。また、幼児期における防災意識の形成や行動特性について検討し、今後の防災保育の充実に資する知見を得ることを目指す。

2. 実施期間

令和7年10月14日～令和8年1月15日

3. 対象

- 実施園：恵水幼稚園
- 対象年齢：5歳児（例：年長児）
- 在籍人数：60名

4. 保育内容

(1) ねらい

- 避難所・避難場所の違いに気付く。
- 災害発生時、命をに自分や周囲の命を守ることについて、日常の経験を通して考えるきっかけを持つ。
- 廃油を利用しエネルギー（灯り）に変える仕組みに気付く。

(2) 具体的な活動内容

- 避難場所・避難所について調べ学習
- 避難場所・避難所見学
- 暗闇体験
- 廃油ランタンづくり

○廃油ランタンづくり



6. 指導方法・配慮事項

- 職員が実際に経験した災害時の様子を写真や言葉で知らせ、災害について知るための気づきを投げかけた。
- 実際に避難所に足を運ぶこと・暗闇を体験することで、子ども達自身が五感を使って気づきを得られるように学びを支えた。
- 暗闇など不安を感じる子もいるため、事前に説明し安心して活動に移行できるような配慮を行った。

7. 子どもの姿・子どもの様子

- 避難訓練時や日常の自然の変化に敏感になり、警報がなると手で口を覆う等、災害に応じて自ら考えて避難の方法を実践する姿が見受けられ、更に防災への意識の高まりが感じられた。
- 園外に出る際など、避難所のマークを見つけて「避難所がある」と気づきを言葉にし、共有する様子があった。

8. 課題・反省点

- 体験に対しての感じ方に差異があり、楽しいものとして受け取る子がいた。
- 廃油など身近にあるものでも扱いが難しい部分がある為、全部を自分達で作り上げるのではなく、今の子ども達にできる役割を明確にし、周りの人と協力することの大切さを伝えることも必要だと感じた。

9. 今後の改善・対応策

- なぜ、この経験が必要なのか理解を深め、経験したことや当事者の思いを言葉にしなが、避難訓練の必要性や防災意識を常に持てるように学びを支えていく。

10. まとめ・考察

本取り組みを通して、幼児が災害時の行動について具体的なイメージを持ち、自分なりに理解しようとする姿が確認された。また、園のみではなく地域に目を向けながら、災害が起こったときに避難ができる場所や避難時の必要物について

も知ることができ、園外での時間や進学後に災害に直面したときの1つの知識として得るものがあったと考える。そして、廃油の活用など、身近な物も再利用することで災害時に役立てられる場合があることも経験を通して子どものきづきへとつなげていきたい。今後は、地域の繋がりを感じながら防災において幼児自身が担える役割について知ることや、年齢差による理解の違いや指導方法の工夫について継続的に見直しながら、防災保育の実践につなげていきたい。

以上

令和7年12月25日 実施園：恵水幼稚園

幼稚園 担当者：山田 瑠花

防災保育に関する報告書（年長児） 「光のワークショップ／キッズ防災士認定式」

1. 目的

本報告書は、幼稚園において実施した防災保育の取り組みについて、その内容および成果、課題を整理し、共同研究機関である大学との研究資料として共有することを目的とする。また、幼児期における防災意識の形成や行動特性について検討し、今後の防災保育の充実に資する知見を得ることを目指す。

2. 実施期間

令和8年1月19日(月)

3. 対象

- 実施園：恵水幼稚園
- 対象年齢：5歳児（年長児）
- 在籍人数：60名

4. 保育内容

(1) ねらい

- 災害時に自分の身を守るための基本的な行動や考え方を日常の経験を通して考えるきっかけを持つ。
- 「光」をテーマにした体験活動を通して、停電時や暗所での安全確保の大切さに気付く。
- 防災を「こわいもの」ではなく「知っておくと安心なもの」として前向きに捉えられるよう学びを支える。
- 話を聞き、考える、試すといった主体的な学びへつなげる。

(2) 具体的な活動内容

- アクションラボ水野さんによる導入のお話（災害ってなに？身を守る行動とは？）。
- 光のワークショップ（懐中電灯や簡易ライトを使った体験、身近なものが災害時に役立つ体験、暗い場所を想定した活動）。
- 「もしも〇〇だったらどうする？」といった場面想定のやりとり。
- 活動後の振り返り（感じたこと・分かったことを言葉にして伝える）。
- 今までの学びを振り返りアクションラボ水野さんから「キッズ防災士」の認定書を受け取る。

5 参考資料





6. 指導方法・配慮事項

- 専門家である水野さんの話を導入に位置付け、子どもの興味・関心を高めた上で体験活動へとつなげる構成とした。
- イラスト、実物、動作を組み合わせ、視覚・体感を通して理解できるよう工夫した。
- 「もしも～だったらどうする？」と問い掛け、子ども自身が考え、言葉にする機会を意図的に設けた。
- 光のワークショップでは、実際に試す・比べる体験を重視し、受動的にならない学びを心掛けた。

7. 成果・子どもの様子

- 水野さんの話に興味を持ち、積極的に自分の考えを発言する姿が見られた。
- 光の体験活動では「明るいと安心」「見えるって大事」といった気づきの声が聞かれた。
- 災害時の行動について、自分なりに考えようとする姿勢が育っていた。
- 活動後、日常生活の中で防災に関連する話題を出す子どもが増えた。

8. 課題・反省点

- 本実践は園内での体験を基盤としており、今後家庭や地域へと学びを広げていく発展性を備えた取り組みであった。
- 子ども自身が家庭で体験を伝える可能性を含んだ実践であり、園と家庭をつなぐきっかけとなり得る活動となった。
- 本活動は、今後地域の避難所や防災設備等と結び付けることで、学びをさらに具体化できる土台となった。
- 教職員が防災教育の在り方を改めて考える機会となり、園全体で防災を捉え直す機会となった。

以上のことから、本実践は園内での体験を中心とした取り組みであったが、家庭や地域へと学びを広げていく可能性を十分に内包している。子どもが体験を語る存在となることで、園・家庭・地域をつなぐ防災教育へと発展する基盤を築いた点は、本活動の大きな意義である。

9. 今後の改善・対応策

本実践で得られた気づきや可能性を踏まえ、今後は家庭や地域との連携を意識した防災教育へと発展させていきたい。子どもが体験を語り、家庭で対話が生まれる仕組みづくりや、地域資源と結び付けた活動を計画することで、防災を日常生活の中で継続的に捉えられる実践を目指したい。

10. まとめ・考察

本実践では、キッズ防災士による専門的かつ分かりやすい関わりと、「光」をテーマにした体験型ワークショップを組み合わせることで、幼児が防災を身近なものとして捉えることができた。災害という不安を伴いやすい題材であっても、体験を通して学ぶことで「知ると安心につながる」「自分にもできることがある」という前向きな意識が育まれた点で子どもの姿に変化が見られた。

特に、暗さと光の違いを実感する活動は、停電時の危険や安全確保の大切さを幼児なりに理解するきっかけとなり、言葉だけでは得られない深い気付きを促した。また、水野さんの話を聞き、自分で考え、試すという流れは、主体的に学ぼうとする姿勢や本物に触れる経験を通し、より深い学びにもつながったと考えられる。

一方で、理解の深さには個人差が見られたことから、今後は継続的な取り組みとして日常保育や家庭との連携の中で繰り返し扱うことが重要であると考えている。

本活動は、防災教育を一過性の行事に終わらせず、幼児期からの生きる力の基盤を育てる実践として意義深いものであった。防災教育は、単なる知識の習得ではなく、状況を理解し、自ら考え、判断し、行動する力を育む点に本質がある。

本実践においても、子どもたちは提示された情報を受け取るだけでなく、「もしも」を想定しながら考え、体験を通して確かめる過程を経験した。これは、幼児教育において重視される主体性や思考力の育成、さらには文部科学省が示す「生きる力」の基礎を培う学びと重なっている。自分の命を守る行動を自分事として捉える経験は、将来にわたって危険を予測し回避しようとする態度につながる。防災を日常生活や遊びの延長として位置付けることで、幼児期からの主体的な学びを支える防災教育の可能性が示唆された。

11. 各クラス担任からの気づき・子どもの様子

水野さんの防災の取り組みにおける子ども達の様子です。

○導入部分

何を守るために避難訓練をしている？「頭」「家族」「命」

避難するときに何があるといい？「ご飯」「懐中電灯」「最悪の場合は雑草を食べる」「雨を飲む」

○ワークショップ中

- ・光の話中「オーライト」
- ・給水中「重い！」「筋トレできそう」
- ・絵を描くときに、お花の形、星の形とイメージして描いていた。
- ・光が上に映るのを見て「うわ～！」「綺麗」と声が自然と漏れていた。
- ・「水族館みたい！」「花火みたい！」
- ・「みんなで集まったら光がいっぱいになった」
- ・「お家でお母さんに見せたい」

報告書提出日：令和8年1月22日

実施園：恵水幼稚園

幼稚園 担当者：主幹保育教諭 畠川 夏希

防災保育に関する報告書（年少児・年中児・年長児） 崇城大学×恵水幼稚園コラボ保育「防災アプリ開発」

1. 目的

本報告書は、幼稚園において実施した防災保育の取り組みについて、その内容および成果、課題を整理し、共同研究機関である大学との研究資料として共有することを目的とする。また、幼児期における防災意識の形成や行動特性について検討し、今後の防災保育の充実に資する知見を得ることを目指す。

2. 実施期間

令和8年1月16日（金）

3. 対象

- 実施園：恵水幼稚園
- 対象年齢：3・4・5歳児
- 在籍人数：年少63名・年中54名・年長60名

4. 保育内容

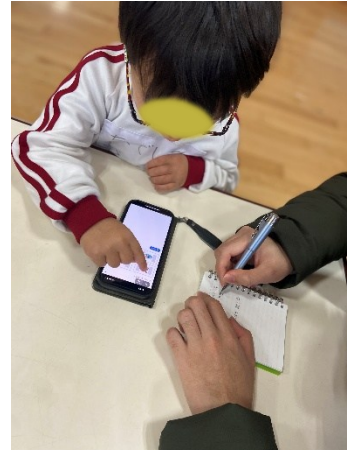
(1) ねらい

- 年少：非常音を知り、災害時に命を守る行動は何か考える。
- 年中：非常音と災害時の適切な行動が結びつくきっかけを持つ。
- 年長：非常音が鳴ったら自主的に適切な行動でがきるようになる。

(2) 具体的な活動内容

- 崇城大学の学生が開発した年齢別「防災アプリ」を体験する。
- 「災害音」と「災害時に持ち出す防災グッズ」について防災ワークシートに取り組む。

5 参考資料



6. 指導方法・配慮事項

- 子どもが不安を感じないように、事前にやさしい言葉で説明を行った。
- 一斉指導だけでなく、個々の理解度に応じて繰り返し声かけを行った。
- 「怖い音」ではなく「知らせる音」への転換を心がけた。

7. 成果・子どもの様子

- 「この音は●●のとき」と言葉で伝えられるようになった。
- アプリを経験した後、子どもたちの気づきから防災への意識の高まりが感じられた。
- アプリ体験を通して、災害時の約束事を理解しようとする発言が増えた。

8. 課題・今後の展望

- アプリ内容の改善・追加。
- 家庭や地域への防災普及。
- 日常の保育の中でも防災に触れる機会を設け、段階的に理解を深めていく。
- 家庭とも連携し、防災意識を共有していく。

9. まとめ・考察

本取り組みを通して、幼児が災害時の行動について具体的なイメージを持ち、自分なりに理解しようとする姿が確認された。特に、アプリ体験や視覚的教材を用いた活動は、防災行動の定着に有効であることが示唆された。一方で、音や環境の変化に対する不安反応も見られ、幼児期の防災保育においては心理的配慮と段階的な指導の重要性が改めて明らかとなった。

今後は、年齢差による理解の違いや指導方法の工夫について継続的に検討し、子どもの姿に基づいた防災保育の実践につなげていきたい。

10. 各クラス担任からの気づき・子どもの様子

●ふじ組

すみれ組さんと一緒にお部屋でアプリに参加しました。すみれ組と同様、日頃の避難訓練や避難所見学に出かけた経験などから理解度がとても高く全問正解することができていました。また、答えの理由まで積極的に伝えてくれる姿が印象的でした。

●すみれ組

これまで防災について避難所に行ったりして学んでいたこともあり、クイズもほとんど迷わず正解を当てることができていました。暗い時の避難で必要なもののクイズで、「懐中電灯」「火」の選択肢があり、その際保育教諭が惑わすような声かけもしたのですが、「火だと火事が起こる」と二次被害を根拠とし答えを導き出す姿が見られました。クイズの難易度を少し上げることで、子どもの防災の知識もより深まったかなと感じます。

●さくら組

これまでの取り組みもあり、お部屋で災害について予習していた時点から「どんな災害なのか」「どのように避難するか」を答える姿がありました。実際にアプリを使って体験をする中で、イラストを見ながら避難の適切な場所など理由を伝えながら回答する姿がありました。イラストがあることで、視覚的な要素を元に「警報」とその災害や避難方法について結びついたのでないかなと感じました。

●ゆり組

大学生の方に緊張するよりも防災についての体験に期待を持ち、興味津々な表情で参加していました。子どもに寄り添われたアプリに次々と正解していき、なぜ間違っているのかまで言葉にして説明することができていました。終わった後には、楽しかった、これで避難できるねという前向きな感想が多く、良い体験になっていました。発言としては、「命」「命を守るため」「死んじゃうとお父さん

とお母さんに会えなくなる」「ほんとにあった時に逃げられるように」というものがありました。

●れんげ組

事前学習として、絵を見て何の絵なのか、その時はどう避難しないといけないのか、警報の音はどんな音なのかなどを一緒に考えながらお話をしていました。その際には日頃の避難訓練で学んだことをお話してくれ、火事の際には「口を抑えて、体は低くして逃げる」「津波や水害は高いところに逃げる、川や海から離れる」などの発言があり、避難の仕方が身についていることを感じました。そのため、当日のアプリのクイズも正解をたくさんできていたようでした。日頃から避難訓練や防災について学んでいる事で、アプリの体験も興味津々で参加していました。

●たんぽぽ組

日頃から避難訓練や防災について学んでいることから、音と絵に対する察知がとても早い様子でした。特に津波と水害に関しては絵を見るだけで「高いところに避難しないと！！」「屋根の上にはいかないと」と、避難の仕方を自言える力には、危機感や訓練で学んでいるからこそその発言に感じました。火事の時には絵を見るだけで「まずはお話を聞いて逃げないと」「口を抑える」等、自分達で考え発言と行動を取る様子がありました。アプリの答えが正解すると「ほらね！」と、自身に溢れる様子でした。

●ひまわり組

事前に5つの災害についてどのような災害なのか、どのように起こるのかをクラス内で考えていたこともあり、音を聞きながら「これは地震だと思う！」「いや、火災だよ！」とお友達同士で話し合いながら参加する姿が見られました。音を流している際にも音から得るヒントがないか集中して聞く姿があり音の中で噴火や大雨というワードが聞こえるとすぐに「これは噴火だ！水害だ！」と声を大きくして答える姿が見られました。何問かあったこともありクイズ形式で楽しみ

ながらも自分の知識と照らし合わせながら前のめりで参加する姿が見られました。

●ばら組

事前にイラストを見ながら災害の種類について確認していたこともあり、音が鳴ると「これはどれかな？」と考えながら、どのイラストと組み合わせられるかを意識して参加する姿が見られました。お友だち同士で話し合いながら意見を出し合ったり、音を声真似して表現したりする姿もあり、遊びの延長のように楽しみながら防災について気付くことができました。終始、笑顔で意欲的に取り組む様子が印象的でした。

●なでしこ組

初対面の大学生のお兄さんお姉さんに緊張している姿がありながらも

参加する姿が見られました。緊張している姿が多かったため、なかなか発言する姿は見られませんでした。「津波は、おうちがおぼれる」とイラストを見て、お話をしたり、アプリの音を聞いて、「音が怖い、びっくりした」と話している子どもの姿がありました。

以上

令和8年1月21日 実施園：恵水幼稚園

幼稚園 担当者：主幹保育教諭 畠川 夏希

「山の保全および防災の視点から国内産木材を活用した 木育教材開発を進めている先進事例の視察」報告書

1. 視察のねらい

本視察は、山の保全および防災の視点から国内産木材を活用した木育教材開発を進めている先進事例を学ぶことを目的とした。特に、防災教育に木育教材を取り入れることで、子どもたちの防災意識や理解にどのような教育的効果が期待できるのかについて、専門家の知見を得ることをねらいとした。

あわせて、森林資源の循環利用と防災教育を結び付けた実践の可能性について理解を深め、今後の教育実践や教材開発に活かすことを目的とする。

2. 視察内容

本視察では、以下の内容について講義および説明を受けた。

- 京都女子大学 矢野真教授による講義
 - 京都女子大学学生による卒業制作・木育おもちゃの展示見学
 - 治具(J I G)の活用による木育について
 - 木育を活用した防災教育教材の開発につながるワークショップ
 - 木育の教育的意義と、防災教育との親和性
 - 子どもの発達段階に応じた木育教材活用の可能性について

- 有限会社岩井木材代表 岩井清氏による説明
 - 国内産木材を活用した木育教材開発の背景
 - 木材加工の工夫や安全性への配慮
 - 教材としての木材の特性（触感、重さ、匂い等）
 - 防災教育における木材活用の具体例
 - 災害に備えて備蓄倉庫での木材の備蓄
 - 「京都森林・木材塾」について

3. 視察方法・配慮事項

視察は、講義および実践をもとに講話を中心とした形で実施された。専門的な内容については、教育現場での活用を想定しながら聴講し、疑問点や実践への応用可能性について積極的に質問を行った。また、木育教材については、安全性や年齢に応じた使用方法、保育・教育現場での導入のしやすさに着目して視察を行った。

4. 視察の成果

本視察を通して、以下の成果が得られた。

- 木育教材は、触れて学ぶ体験を通して、防災を自分事として捉えやすくする効果があることを理解できた。
- 山の保全と防災が密接に関わっていることを、子どもにも伝えやすい形で教育できる可能性を見出した。
- 国内産木材を用いることで、環境教育・防災教育・地域理解を横断的に進められる点に大きな意義を感じた。
- 専門家の視点から、木育教材が子どもの主体的な学びを促す有効なツールであることを学んだ。

5. 課題

一方で、以下の課題も明らかになった。

- 木育教材を防災教育として体系的に位置付けるための、指導計画やカリキュラム整理が今後の課題である。
- 教材の導入にあたっては、コストや保管場所、継続的な活用方法について検討が必要である。

6. 今後の展望

今後は、本視察で得た知見をもとに、

- 防災教育の中に木育の視点を取り入れた実践の検討
- 子どもの発達段階に応じた木育防災教材の活用方法の研究
- 地域資源としての森林や木材を活かした教育活動の推進

を進めていきたい。また、大学や木材事業者との連携を継続し、より実践的で効果的な防災教育の構築を目指す。

7. まとめ

本視察を通して、木育は単なる環境教育や情操教育にとどまらず、防災の中でも耐震という視点と結び付けることで、より実践的で生活に根差した学びへと発展し得ることが明らかとなった。

京都女子大学矢野真教授の講義および有限会社岩井木材代表岩井清氏の実践的な知見から、森林の保全、木材の循環利用、建築の安全性は相互に密接に関連しており、これらを分断して捉えるのではなく、「暮らしを守るための自然資源の活用」という一体的な視点で捉えることの重要性が示唆された。

特に、木造建築における適切な木材選択や耐震改修の考え方は、防災を「災害時の行動」だけでなく、平常時からの備えとしての住環境づくりとして捉え直す契機となった。

これは、防災教育を日常生活と結び付けて理解する上で、極めて有効な視点であると考えられる。

また、木育の特徴である「触れる」「比べる」「組み立てる」といった体験的な学びは、建物の強さや木材の役割を感覚的に理解することを可能にする。これにより、子どもたちは防災を抽象的な知識としてではなく、自分たちの暮らしに直結する問題として主体的に捉えるようになることが期待される。

さらに、京都という歴史的建築物が多く残る地域性に着目すると、長年災害を乗り越えてきた伝統木造建築の知恵は、現代の耐震・防災教育に活かすことのできる重要な学習資源である。無垢材を用いた建築や修復の実践は、文化の継承と防災を同時に考える視点を育む点でも教育的価値が高い。

以上のことから、防災教育に木育を取り入れることは、

- 自然環境への理解
- 安全な暮らしを支える構造や素材への関心
- 地域文化や伝統への敬意
- 子どもの発達特性に即した学び
- 防災を生活と結び付けて理解する力
- 安心感を伴った主体的な防災意識

を育てる可能性を持つと考えられる。

今後は、木育教材を活用した防災教育の体系化や、発達段階に応じた指導方法の検討を進めることで、持続可能で実践的な防災教育モデルの構築が期待される。また、遊びや生活の中に自然に組み込める木育防災活動を継続的に実践し、幼児期からの防災教育の充実を図っていきたい。

8. 参考資料(写真添付)

●京都女子大学矢野真教授による講義





●有限会社岩井木材視察



以上

令和8年1月29日

学校法人みゆき学園 幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園
主幹保育教諭 鳶川 夏希

木育おもちゃ・奈良おもちゃ美術館 視察報告

1. 視察のねらい

本視察は、国産材を活用した木育おもちゃおよび木育を基盤とした教育施設である奈良おもちゃ美術館を訪問し、幼児教育における木育と防災教育の関連性を探ることを目的として実施した。特に、山の保全と防災の視点を取り入れた教材開発の先進事例を把握し、園での教材開発や教育活動に活かすことをねらいとする。

2. 視察内容

(1) 木育おもちゃ

- ・国産材（スギ・ヒノキ等）を使用した積み木、パズル、音の出る玩具などを体験。
- ・木材の香り・温かさ・手触りを活かした「五感を使った学び」の特徴を確認。
- ・子どもの安心感、集中力、情緒の安定に寄与する点についての経験。

(2) 奈良おもちゃ美術館

- ・奈良県産材を活用した展示・遊び場を見学。
- ・木育を通じて「森を守ることが地域の防災につながる」という理念を確認。
- ・専門家から、木育おもちゃの効能や意義・効果についてヒアリング。

国内産木材を活用した玩具や教材を通じて、子どもが自然環境や森林資源に親しみながら学ぶ仕組みや遊びの中で防災意識につながる仕掛けや、子どもの主体性が促される空間づくりについて観察を行った。

3. 視察方法

- ・館内展示の見学および木育おもちゃの体験。
- ・担当者・専門家へのヒアリング（教材の使用用途や、木育おもちゃの地域材活用の意義）。
- ・写真、メモによる記録を行い、後日の教材開発に活用できる情報を収集。

4. 配慮事項

- ・来館している子どもたちの活動を妨げないように、見学動線や時間帯に配慮した。
- ・撮影および資料提供については事前に許可を得て実施した。
- ・視察内容を園で活用する際は、著作権や取り組みの意図を尊重する。

5. 視察の成果

- ・木育おもちゃが防災教育の導入として有効であることを確認した。
 - 木の温かさや香りが子どもの安心感を高め、学びへの集中を促す。
 - 五感を使った体験が、自然環境や防災への興味につながる。
- ・山の保全と防災を結びつけた教育の重要性を理解した。
 - 森林が災害を防ぐ役割を持つことを、木育を通じて子どもに伝えられる。
 - 地域材を使うことが、地域の森林保全・防災力向上につながるという専門家の知見を得た。
- ・教材開発の具体的なヒントを得た。
 - 木の形状・触感を活かした教材のアイデア
 - 防災の「備える・守る・つながる」を遊びの中で学べる仕組み
 - 地域材を使ったワークショップの可能性
- ・連携の可能性が広がった。
 - 美術館や木育団体との協働により、園児・地域住民が参加できる活動の展開が期待できる。

6. 課題

- ・木育教材を防災教育に組み込む際、保育教諭の指導方法や安全管理の整理が必要。
- ・視察内容を園の実情に合わせてどのように取り入れるか、職員間での共有と検討が求められる。
- ・連携団体との協働を継続するための仕組みづくりが今後の課題。

7. 今後の展望

- ・視察で得た知見をもとに、園独自の木育×防災教材の開発を進める。
- ・年間指導計画に木育を取り入れ、自然・環境・防災を横断的に学べる活動を構築する。
- ・おもちゃ美術館等、木育団体との連携を深め、園児・保護者・地域住民が参加できる木育・防災イベントを企画する。

8. まとめ

今回の視察を通じて、木育おもちゃおよび奈良おもちゃ美術館の取り組みは、幼児教育における「自然とのつながり」と「防災への気づき」を同時に育む重要な教育資源であることが明確になった。特に、国産材を活用した木育教材は、単なる遊具としての役割にとどまら

ず、子どもたちが五感を通して自然環境に親しみ、森や木の存在を身近に感じるための“入り口”として大きな価値を持つことが確認できた。

木材の温かさや香り、触れたときの安心感は、幼児の情緒を安定させ、学びへの集中を促す効果があるとされる。これは、防災教育のように「少し難しい」「抽象的になりがちな」テーマを扱う際に、子どもが主体的に関わるための重要な土台となる。木育教材を通じて自然に触れる体験は、子どもたちが「森があるから災害が防げる」「木が地域を守っている」という概念を、感覚的に理解する助けとなる。つまり、木育は防災教育の“導入”として非常に相性が良いことが改めて確認された。

また、奈良おもちゃ美術館の取り組みからは、木育が単なる教育活動にとどまらず、地域の森林保全や林業、地域産業とのつながりを生み出し、地域全体の防災力向上にも寄与していることがわかった。地域材を使うことは、地域の山を守り、災害を減らすことにつながるという「循環の視点」を子どもたちに伝えるうえで非常に有効である。これは、園が今後取り組む教材開発においても重要な視点となる。

さらに、視察を通じて得られた専門家の知見は、教材開発の方向性を具体化するうえで大きな示唆を与えてくれた。木の形状や質感を活かした教材のデザイン、遊びの中に防災の要素を自然に組み込む方法、地域材を使ったワークショップの可能性など、園独自の教材開発に応用できるアイデアが多数得られたことは大きな成果である。

一方で、視察内容を園の実情に合わせてどのように取り入れるか、保育者の指導方法や安全管理をどのように整えるかといった課題も明らかになった。木育教材を防災教育に組み込むには、保育者がその意義を理解し、日々の保育の中で自然に活用できるような研修や共有の仕組みが必要である。また、視察先との連携を継続したり、地域住民や保護者を巻き込んだ活動へと発展させるためには、園としての明確なビジョンと計画が求められる。

総じて、今回の視察は、木育と防災教育を統合した新たな教育の可能性を見出す貴重な機会となった。今後は、得られた知見をもとに、園児が主体的に学び、地域とつながりながら成長できる教育環境を整えていくことが期待される。木育を通じて自然を大切に思う心を育てることは、結果として「自分たちの地域を守る力」につながる。今回の視察は、その第一歩として大きな意味を持つものであったと言える。

※添付資料（視察写真）

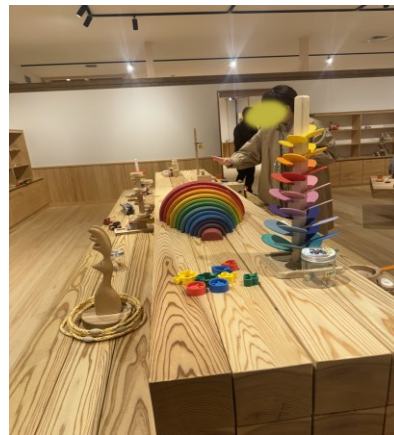
添付資料1：奈良おもちゃ美術館 館内



添付資料2：奈良おもちゃ美術館にて木育おもちゃの体験の様子



添付資料3：奈良おもちゃ美術館展示木育おもちゃ



以上

令和8年1月29日

学校法人みゆき学園 幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園

主幹保育教諭 石坂 麻未

幼児向け防災教育アプリ ワークショップについて

システムの機能・性能

2026/01/16イベント実施
【報告書提出日2026/01/31】
崇城大学IoT・AIセンター学生クラブ
崇城大学SCB放送局

- 教材システム（H5P、テスト、動画 etc）の作成
- アクセスアカウントのロール（学生、教員、権限のない教員 etc）の付与
- アクセスアカウントの教材アクセスに関する様々な情報の閲覧
- *アクセス時間、滞在時間、正答率、日時別の回答内容 etc

システムの扱い方

[規格 - MoodleDocs](https://docs.moodle.org/3x/ja/%E8%A6%8F%E6%A0%BC)

<https://docs.moodle.org/3x/ja/%E8%A6%8F%E6%A0%BC>

当日の流れ（例）

1. 集合・移動

- 8:20 崇城大学 集合
- 8:30 崇城大学 出発

持参物 スマホ（充電 MAX） 筆記用具 メモ用紙

2. 現地到着・事前準備（恵水幼稚園）

- 9:30 現地（恵水幼稚園） 着
 - アプリの操作チェック
 - 担当生徒の確認
 - アンケート内容の確認
 - 幼稚園のスマホ8台にアカウントを2つずつ入れる
 - ※スマホあり：4つ

3. ワークショップ

- 10:40 ワークショップ開始
- 班分け・スケジュール

班	対象年齢	人数	実施時間
①	年中	20人	20分
②	年少A	10人	15分
③	年少B	10人	15分
④	年長	20人	20分



防災クイズ結果

満点：100点

区分	体験人数	平均点	標準偏差
年少	9	47	35.3
年中	12	73	24.9
年長	13	83	16.0
合計	34	68	29.4

実施内容

- ・ワークショップを園児に対して実施
- ・園児たちの様子をメモする

注意点

自分が担当した園児の

- ユーザーネームを記録すること



4. 帰路

- 12:00 頃 恵水幼稚園 出発
帰りのバスでアンケートに回答&活動の振り返り

再現性

本活動では、実施時間、対象年齢、班分け、手順を事前に明確化することで、他の教育現場においても同様の形で実施可能な再現性を意識した構成とした。

地域貢献

地域貢献について（現時点）

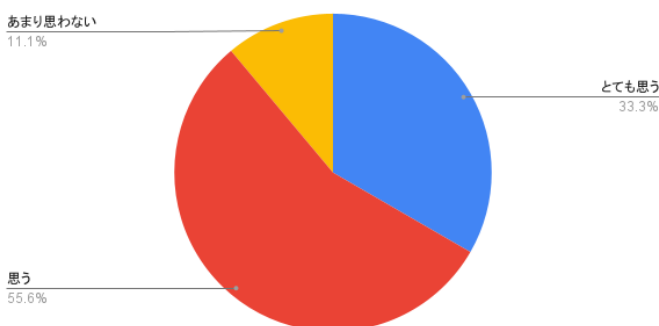
- 本活動は、幼児向け防災教育を通じて、地域に防災を考えるきっかけを提供する地域貢献活動である。
- アプリやワークショップを用いることで、幼児が防災に親しみやすい形で学ぶことができ、防災への関心を高めている。
- 園児が学んだ内容を家庭で共有することで、保護者にも防災意識が広がり、家庭内での防災行動の見直しにつながる効果が期待できる。
- 大学生が地域の教育現場に関わることで、大学で学んだ知識や情報技術を地域に還元する機会となっている。

今後の展望について

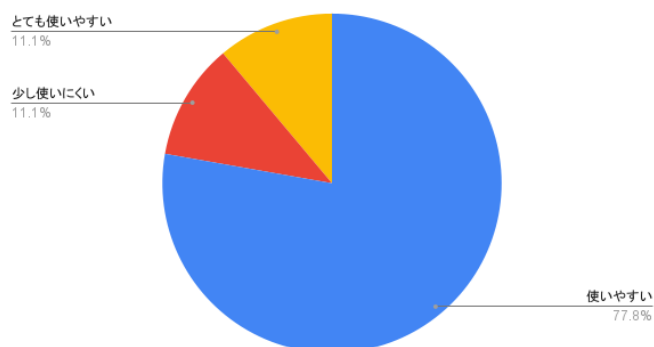
- 今後は、幼児教育を起点として、地域の人々が防災について交流できる場をつくることで、地域防災の拠点としての役割を担うことが期待される。
- 幼稚園を中心に、保護者や地域住民が関わる機会を増やすことで、世代を超えた地域交流の促進につながる。
- 防災教育を通じて、災害時だけでなく、日常における防犯や見守り意識の向上にも発展させることが可能である。
- 将来的には、実施手順や教材を整理し、他地域でも活用できる地域防災モデルとして展開していきたい。

保育職へのアンケート結果

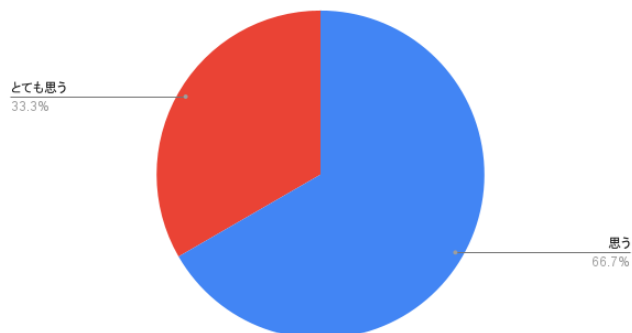
「クイズの内容は、子供たちの年齢に合っていると感じましたか」の
カウント数



「防災教育アプリは使いやすかったですか」のカウント数

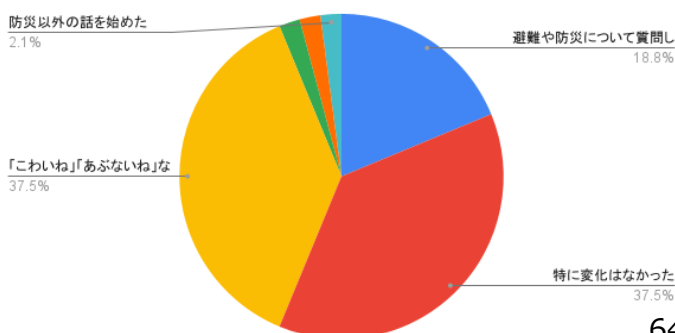


「今後もこのアプリを使っていきたいですか？」のカウント数

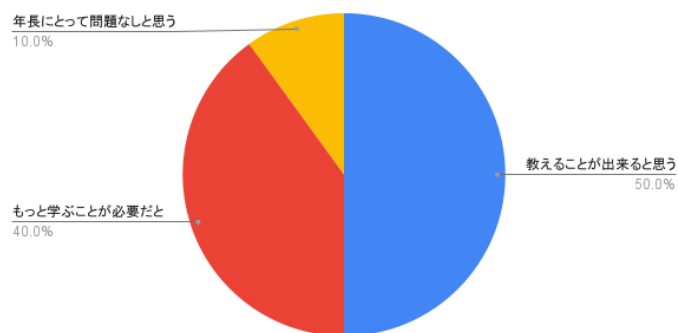


学生ボランティアへのアンケート結果

「クイズのあと、防災に関する行動や発言が見られましたか」のカ
ウント数



「今後子供たちがこのアプリを使って防災について教えることが出
来るとおもいますか？(必須)」のカウント数



□報道資料

J:COM 熊本「チキチキつながるラボラトリー」2026年2月号
「恵水幼稚園による地域とのつながりを用いた防災教育の取り組み」

[番組サイト](#) [YouTube](#)



YouTube 番組
2次元バーコード

□連携体制

事務局：学校法人みゆき学園 幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園

理事長 鷲山恵水 園長 鷲山恵真

株式会社アクションラボ

コンセプトラボ株式会社

みゆき校区自治会

熊本市南区区民部 幸田まちづくりセンター

□連携研究者

吉津晶子（熊本学園大学） 矢野真（京都女子大学） 田爪宏二（京都教育大学大学院）

□研修協力

岩井清（有限会社岩井木材）

□事業協力

熊本市立城南中学校 教頭 / 熊本市立城南中学校 PTA 副会長

株式会社花屋はな輔 代表取締役 / 株式会社Day1 代表取締役 / 株式会社LEOC

学校法人みゆき学園 恵水幼稚園園児、保護者、職員のみなさま

熊本市南区区民部幸田まちづくりセンター 所長・主幹兼主査

熊本市南区御幸校区自治会 会員のみなさま / 熊本市南区御幸校区 民生委員

株式会社アクションラボ 水野直樹 / 崇城大学 SCB 放送局 学生メンバー

崇城大学 IoT・AI センター学生クラブ 学生メンバー

崇城大学 IoT・AI センター 内藤豊 / l'art 西山嵩人

内閣府 令和7年度 地域防災力の向上に資する「コミュニティ防災教育推進事業」
未就学児への防災教育
楽しみながら学ぶ、幼児からのコミュニティ防災
～持続的な取り組みによる地域共創社会構築をめざして～

2026年1月31日発行

発行者 学校法人みゆき学園 幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園

〒861-4172 熊本県熊本市南区御幸笛田3丁目13-12

<https://keisui-youchien.jp/>

防災教育アプリ（防災音当てクイズアプリ）

学校法人みゆき学園 幼保連携型認定こども園 恵水幼稚園

1. 概要

このアプリは、こどもたちが楽しく防災について学べる、災害時のサイレンについてのクイズです。アプリを用いることで、さまざまな種類のサイレンについて知り、その音に応じてどのような行動を取るべきか考えることができます。

2. アプリの説明

アプリは、こどもたちへのヒアリングを通して、こどもたちも簡単に操作できるように作られています。

説明動画が再生され、途中でサイレン音が鳴り、何のサイレンかのクイズが表示される仕組みです。

アニメーションやイラストを用いられており、こどもたちも楽しく災害時のサイレンについて知ることができます。



図 実際の防災音当てクイズアプリ画面

※アプリは「Moodle」を使って構築しています。

アプリ制作：崇城大学 IoT・AI センター